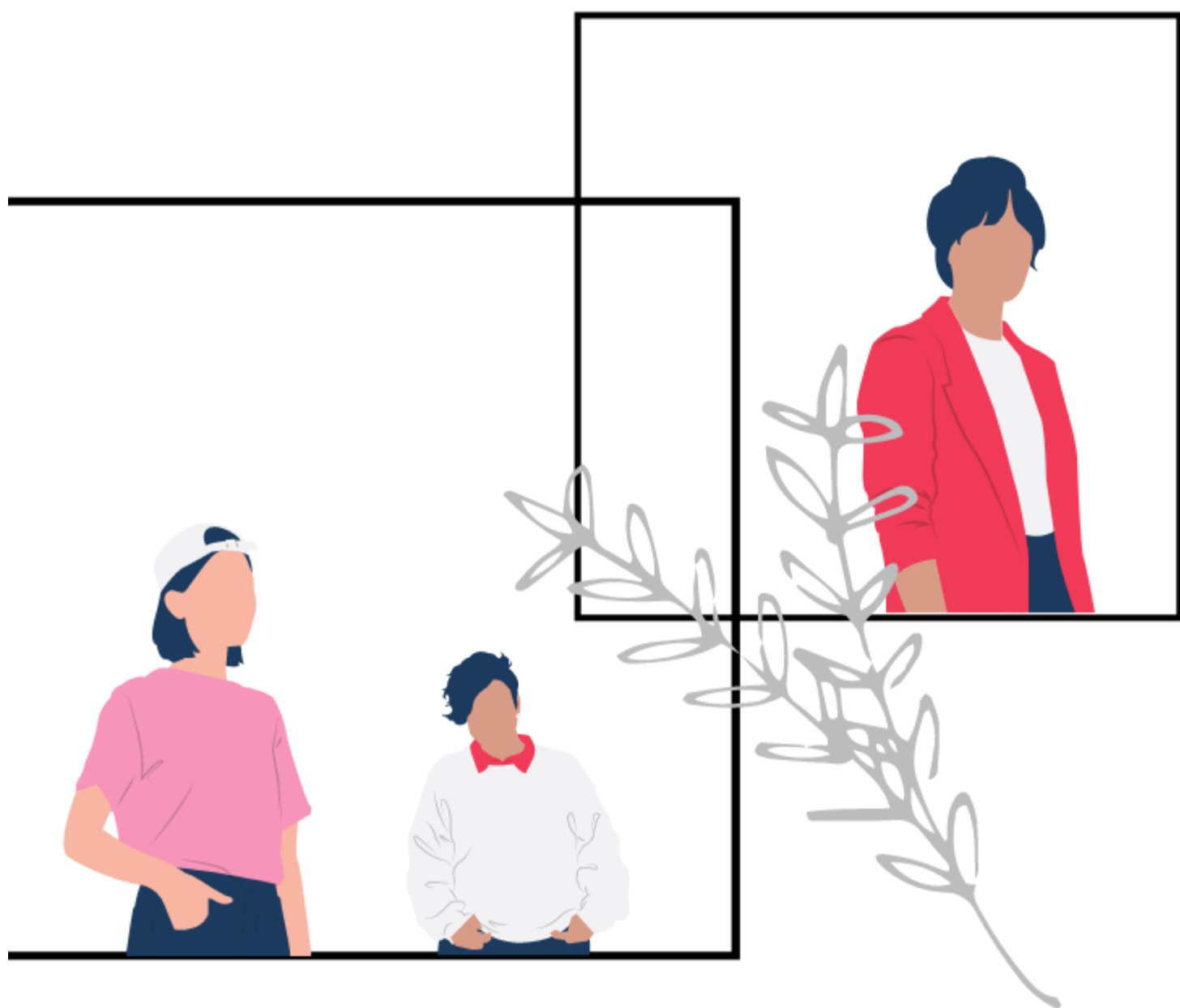


外国につながる第二世代の
横浜市若年女性インタビュー

調査報告書

2022年 3月



男女共同参画センター横浜南

目次

はじめに	1
第1章 調査の概要	2
1 取組の流れ.....	2
2 背景と対象者の検討	3
3 本年度調査の目的.....	4
4 調査対象者の設定と募集.....	4
第2章 インタビュー調査結果.....	5
1 インタビュー調査の概要.....	5
2 回答者のプロフィール.....	6
3 インタビューレポート.....	8
第3章 当事者の語りから読み取る.....	50
1 当事者が語る困難.....	50
2 解決に向けて必要なこと	61
第4章 見えてきた課題と今後に向けて	66
1 インタビューを終えて.....	66
2 本調査で見えてきたこと.....	68
3 今後に向けて～私たちにできること.....	71
資料.....	72
・参考文献	
・外国人女性 インタビューの流れ [質問項目]	
・インタビュー同意書	

はじめに

～外国にルーツを持つ女性の生活課題・ニーズ把握と地域社会の変容に向けて～

横浜市では 1990 年代、外国人人口の増加を受けて『横浜市外国人女性の生活実態調査』が行われた(1997 年、横浜市市民局女性計画推進室)。100 名ほどの多様なエスニシティの女性にヒアリングした調査報告書では「日本社会からの阻害」「不平等な扱い」があり、「外国人女性の生活の安定には、地域社会、市民の側が異文化を理解し人権を尊重しあう社会づくりのために、家庭、地域、学校、職場など様々な角度からジェンダーの視点に立った啓発や交流の機会の充実が必要」との提言が出されていた。

それから四半世紀たった現在、横浜市の外国籍住民登録者数は 10 万人を超え、「外国人材の受入れと多文化共生」は市の重要施策となっている。市の中心部では下町の商店街で、公園で、色々な言語が聞かれるようになった。小・中学校には日本語を解さない子どもたちが増え、外国人の母親へのサポートが必要とも聞く。変化に呼応して、各区の国際交流ラウンジや市民による学習支援教室等の活動も活発になっている。

横浜市男女共同参画第 5 次計画（2021-2025）においても、施策 5「困難を抱えた女性への自立支援」には〈様々な困難を抱える外国人女性・母子等に対する支援の充実〉が掲げられた。男女共同参画センターにおいても、外国にルーツを持つ女性の生活上のニーズ把握のための調査や、センターで実施する事業や提供する情報・サービス等において多様なルーツをもつ住民を包摂できるような設計が求められている。

男女共同参画センター横浜南では、これまで社会的経済的に困難を抱える女性を対象に就業支援等の事業、情報サービスや場を提供してきたが、センターが位置する南区をはじめ市中心部の地域には外国につながる女性や子どもたちが急増した。国際結婚や不安定な在留資格、子育てや介護の担い手として、あるいは労働者として、女性特有の課題は外国人にもあると思われる。仕事や暮らしの状況について、また受入れ側である地域社会の今後のあり方について課題を把握するため、本調査を実施することとした。

1 年目（2020 年度）の予備調査では、検討委員をまじえて設計を行い、外国人支援を行ってきた団体や個人を対象にヒアリングを行った。2 年目（2021 年度）の本調査では、支援団体から紹介を受けた当事者の 20 代女性 11 名にインタビューを行い、それらの語りから大きな示唆を得た。すでに第二世代になり、日本国籍取得者が少なくない中でも、地域社会に起因する困難が根強くあった。その中で生きていく彼女たちの強さがあった。

ご協力いただいたすべての団体、方々に御礼申し上げます。本報告書が、地域社会にどんな変容が急がれているのか、私たちみなで考え、語られた声に応えていくための一助となれば幸いです。

第1章 調査の概要

1 取組の流れ

2か年にわたる本調査の流れは、次のとおりである。

■2020年度 予備調査		
	検討会	調査活動
2020年8月	第1回検討会 「調査目的の確認、および支援団体ヒアリング先と項目について」	先行調査の収集・検討
10月～ 2021年1月		◎支援等関連団体へのヒアリング (6件)
2月～3月	検討委員への個別ヒアリング 「支援団体インタビュー結果の分析、 次年度調査方針・方法の検討」	インタビュー記録および結果概要の とりまとめ
■2021年度 本調査(インタビュー調査)		
2021年 5月～6月		インタビュー調査の設計 対象者の募集・決定・調整
2021年 7月～11月		◎対象者へのインタビュー (11件) インタビューレポート作成
12月	第2回検討会 「インタビュー調査報告、ご意見聴 取、報告書内容の検討」	
2022年 1月～3月		◎調査報告書作成

【検討委員会 委員】

※敬称略

中村 暁晶（公益財団法人横浜市国際交流協会 なか国際交流ラウンジ 館長）

長谷部美佳（明治学院大学教養教育センター 准教授）

栗原 渉（横浜市政策局男女共同参画推進課 担当課長）

菊池 朋子（公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会 事業本部長）

2 背景と対象者の検討

～予備調査から見えてきた、第二世代の若年女性たちの存在～

2020年度の予備調査では外国人女性をめぐる生活や仕事、健康の課題について、日頃からかかわりをもっている次の団体に当センターの職員が出向き、ヒアリングを行った。

【ヒアリング先(団体)】

- ・横浜市健康福祉局 高齢健康福祉課
- ・公益財団法人横浜市国際交流協会 横浜市多文化共生総合相談センター
- ・特定非営利活動法人 移住者と連帯する全国ネットワーク
- ・神奈川県勤労者医療生活協同組合 港町診療所(産婦人科医)
- ・医療法人ことぶき共同診療所(心療内科医)
- ・カトリック藤沢教会・救急の会(代表 ボランティア相談員)

ヒアリングの結果、外国人女性の前に立ちはだかる重層的な「壁」の一つとして、第二第三世代である若年女性のアイデンティティ形成や自己肯定における困難が浮かび上がってきた。このことは男女共同参画センターが支援事業を行ってきた働きづらさに悩む若年女性の対象層と共通していると感じられた。自分の意志で渡日したのではない第二世代の若い女性たちは日本で育ちながら、アイデンティティの葛藤やメンタルヘルス、仕事上の課題を抱えており、そこには日本社会のジェンダー不平等や差別がなんらか影響しているのではないかと推察されたのである。

ヒアリング先のある団体理事は、「在日移民女性の経験には、日本社会のジェンダー不平等や差別が刻印されていると感じることがある」(We Learn 2020.10 巻頭言)と書いている。日本で生まれ育った、外国にルーツをもつ女性にも日本社会のジェンダー不平等や差別が影響しており、アイデンティティの葛藤がある。それだけでなく、第一世代(彼女たちの母の世代)との心理的距離感や第一世代のようになれない自身への負い目があるのではないか。そのような見方も、別の団体で聴き取った。

しかし、自ら言わなければ外国にルーツがあるとは見られないこともあり、公的なサービスも受けづらくなっているのではないか。そこには可視化されていない層としての生きづらさがあり、社会的排除が起きてはいないだろうか。そこで2年目の本調査では、外国につながる第二世代(20～30代)の女性を対象にしぼり、インタビュー調査を実施することにした。

3 本年度調査の目的

本調査の目的は第一に、横浜市内に住む、外国につながる二世世代の女性の生活状況、直面している課題や困難、ニーズを把握することと、彼女たちの生きづらさが軽減され、包摂されるような望ましい地域社会のあり方を考えることである。

さらに、外国につながる二世世代の女性に対して、市内の公的社会的資源とのかかわり、あるいは横浜市男女共同参画センターの利用の可能性を探ることもできればと考えた。

4 調査対象者の設定と募集

(1) 調査対象者の設定

対象者は2で述べた経緯により「外国につながる二世世代(20~30代)の女性」と大枠を設定した。さらに具体的には「横浜市内で生まれ育ち、あるいは、横浜市内に在住している(途中転居した者も含む)、外国につながる二世世代(20~30代)の女性」とした。ここで外国につながる二世世代とは、外国または日本で生まれ、どちらかの親が外国ルーツであり、10代までに親と共に日本に定住開始をした者と私たちは定義した。

人数は、多様なエスニシティと背景をもつ10人程度を想定した。

(2) 調査対象者の募集

2020年度予備調査のヒアリング先を含め、以下の支援団体や支援者にインタビューを受けてくれる方の紹介を依頼した。紹介された方の中でインタビューを承諾された方に対して、質問項目と同意書をあらかじめ提示した。

ここで外国人の子どもを対象とした複数の学習支援団体に新たに依頼したのは、女性(母親)を支える支援団体ではなく子どもを支える団体に依頼したほうがこの場合は対象者に出会えるだろうという助言を、女性シェルターで長く女性支援を行ってこられた方から受けてのことだった。

【協力団体】

- ・公益財団法人横浜市国際交流協会 なか国際交流ラウンジ
- ・医療法人ことぶき共同診療所
- ・認定NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ(ME-Net)
- ・わたぼうし教室 横浜
- ・ユッカの会
- ・ART LAB OVA アートラボ・オーバ
- ・カトリック末吉町教会

第2章 インタビュー調査結果

1 インタビュー調査の概要

(1) 目的

横浜市内で生活する外国につながる女性二世世代の生活課題とニーズを把握し、望ましい地域社会の在り方を考えるものとする。さらに、市内の公的社会資源へのつながりの必要性、あるいは横浜市男女共同参画センターの利用者層としての可能性を探る。

(2) 調査対象

横浜市内に住む、外国につながる二世世代(20～30代)の女性 11人
(シングルかどうか、エスニシティ・国籍は問わない)

(3) 調査実施期間

2021年7月～11月

(4) 実施方法

直接またはオンラインによる90分程度の面談とし、必要に応じて支援者の同席を得た。質問と記録は、主としてインタビュアーが担当し、協会スタッフが同席した。

(5) 調査者

- ・インタビュアー
飯島裕子氏(ノンフィクションライター、東京福祉大学社会福祉学部専任講師)
- ・男女共同参画センター横浜南 職員
小園弥生(館長)、石山亜紀子(管理事業課長)、和田朋子(担当職員)

(6) 調査項目

- プロフィール(年齢、国籍や在留資格、婚姻、就業形態、住まい等)
- 来日の時期と経緯(親の選択)
- 使用言語、日本語の習熟度
- 学校や職場の選択
- 現在の状況(健康状態、仕事、家族との関係等)
- 主な困りごと
- 将来の希望
- 今後に向けての提案(男女共同参画センター、地域社会に対して)

(7) その他

聞き取った内容は個人が特定されないよう加工し、本人の了解を得てここに掲載した。個人のライフヒストリーはインターネットでの公開はしないこととした。(資料一同意書 P.76 参照)

2 回答者のプロフィール

回答者 11 人のプロフィールをまとめると、次のとおりである。

○年齢

- ・ 20 代前半 6 人、20 代後半 5 人（最低 20 歳、最高 29 歳、平均 24 歳）

○国籍・在留資格とルーツ国

- ・ 日本国籍：5 人（フィリピン 3 人、タイ 1 人、ベトナム 1 人）
- ・ 永住者：4 人（中国 2 人、韓国 1 人、日系ペルー 1 人）
- ・ 家族滞在：2 人（中国 1 人、フィリピン 1 人）

○来日時期

- ・ 日本生まれ：4 人
- ・ 就学前年齢：1 人
- ・ 小学生年齢：3 人
- ・ 中学生年齢：3 人

○親の来日と本人

- ・ 親が日本で定職を持ち、家族一緒に日本で暮らすことを選択：5 人
- ・ 親が来日し、本人がある程度成長してから日本に来日(呼び寄せ)：2 人
- ・ 母親が来日し、日本人の父親と結婚して本人が出生：4 人

※日本における生活のスタートは、本人に選択の余地はなく、親世代の選択によるものであり、その後の人生を規定する最初の大きな要因となっている。

○学歴

- ・ 日本の高初中退：1 人
- ・ 日本の高卒：1 人
- ・ 日本の大学に在学中：1 人
- ・ 日本の大学・大学院卒：5 人
- ・ 日本以外の大学・専門学校卒：2 人
- ・ 日本の専門学校卒：1 人

○就業状況

- ・ 正規職：4 人（総合職 2 人、医療サービス、保険営業）
- ・ 非正規職：6 人（飲食・小売医療サービス 4 人、英会話講師、公益法人）
- ・ その他：1 人（大学生）

○婚姻

・未婚：7人（うち子どもあり1人）

・既婚：4人（うち子どもあり2人）

夫の出身国：同国：2人、他国：1人、日本：1人

○同居状況

・一人暮らし：1人

・1世代同居：2人（夫と二人暮らし）

・2世代同居：6人（夫と子どもと：1人、両親と：2人、母と：1人、
両親ときょうだいと：1人、母ときょうだいと1人）

・3世代同居：2人（夫と子どもと母ときょうだいと、両親と子どもと）

○住まい

・持ち家：5人（うち3人は親の持ち家）

・賃貸：6人

3 インタビューレポート

ここでは、11人の語りについて個人を特定しないようA~Kとし、記載する。

Aさん

●プロフィール

年齢	20代後半（中国生まれ）
国籍・在留資格	中国・永住者
来日してからの期間	14歳～現在
横浜市への在住歴	11年
最終学歴	大学院
婚姻状況	未婚
同居者	なし（一人暮らし）
就業状況	アルバイト
住まい	賃貸

●呼び寄せられて言葉ができず、つらかった中学時代

中学3年になる2週間前に来日。母はその数年前から日本に働きに来ていて、私は(中国の)祖母の家で従姉妹たちと一緒に育ち、週末は近くに住む父の家に行っていました。日本で母の仕事が忙しくなると小さな子の面倒をみるのは難しいので、弟も中学生になってから来日しました。来日当初は言葉がまったくわからず、母は日中仕事に出かけてしまうから、家から一步も出ることができなくてつらかったです。

中国では自分のことは自分でできる普通の中学生だったのですが、日本では日本語がわからず、言葉を発することができませんでした。数学の授業では答えが分かったのですが、日本語での数字の言い方がわからず、また日本人らしい発音で言えないので笑われるという恐れもあって手が挙げられませんでした。声をあげない＝意思がないように受け止められ、文化祭でも大道具係しかできず、しかも何をやってよいか分からず聞くこともできなかったのです。すると「なぜ何もしないの?」というクラスメイトたちの白い目を感じ、戸惑いながらも自分の気持ちを伝えられませんでした。

中学にはヤンキーっぽい人たちがいて、来日して1~2か月の時、仲がいい中国人の女友だちで髪を染めている子が、そのヤンキーっぽい日本人の同級生に喧嘩を仕掛けられました。私たちは喧嘩を回避するために仲良くしようとしたのですが、人工呼吸の実技練習中にたまたま中国語で数を数えた友達が、その日本人同級生の悪口を言っていると勘違いされ、私たちはトイレに呼び出され暴力をふるわれました。先生を呼びに行ったけれど日本語が通じず、引っ張ってトイレに連れてきましたが、この事件は本当にショックでした。「私がここにいることは誰からも歓迎されていないんだ」「日本語が分からないのに日本人の場に入ってきてしまってごめんなさい」と思い、すべてに自信が持てなくなったのもこの頃です。

その後、担任の先生がみんなの前で「この子たちは自分がいたいからここにいるわけじゃ

なくて、親の都合でここにいるんだ」と話してくれた記憶があり、嬉しかったのですが、この時期はまだ日本語が良く分からなかったのも、もしかしたら私の想像かもしれません。でも、それほど自分が望んでここにいるのではないということをみんなに知ってもらいたかったと思います。それまでは、みんなのすでにある場所に途中から入ってきた自分が悪いと思っていたのですが、先生の言葉で救われました。

●高校受験の壁

中国では水泳の実技の授業がなく、皆とっしょに水着になるのも恥ずかしく、自分の容姿に自信がなかったのも、体育の授業を見学していました。すると成績が1になり、高校受験にとっても不利だということが後で分かりました。誰もそれについて教えてくれる人はいませんでした。

高校受験では中学1年と2年の日本での成績がなく、内申も良くなかったために前期では落ち、後期で来日経験が浅い生徒のための外国人特別枠で県立高校へ入りました。受験の時、母は中国の正月のため、友人に娘の面倒をみるよう頼んで帰国してしまい、重要な決定を一人でしなければならず、大変な思いをしました。一般の入試を受けるために選んでいた学校は難しいので、外国人向け特別枠のある学校に変えようと先生から連絡がありましたが、それらの学校の違いが分からず、自分に合っているかどうかを考える余裕もなく、ただただ情報が不足していました。

●日本語教師を目指して大学へ

高校では、皆に認めてもらうには日本語を話すしかないと思い、日本語の勉強を頑張りました。日本語ができなければ将来がないと思っていました。それまでも毎日、日本語は勉強していましたが、高校では休み時間にも勉強しました。外国人のための日本語の特別授業があり、その日本語の先生がとても素敵なお人でした。「外国人だからできるのはここまで」とは言わずに「頑張ったらこういう道もある」と道を提示してくださり、希望を与えられました。

高校1年で日本語能力試験N1*1に合格。内申点もどんどん上がり、成績は高校2年で5段階の平均4.9、学年トップとなり頑張ればできるんだと自信がつき始めました。それでも私は外国人の中では優秀でも中途半端だと感じていました。中国にいる同級生ほど勉強していない、日本人には絶対に追いつけないという気持ちがありました。日本語は長所でもなくて当たり前で、スタート地点。しかし日本語と中国語、すぐできなくても半分ずつなら合わせて100になるかなと思い、日本語の先生の影響もあり指定校推薦で私立4年制大学の日本語教育専攻へ進学することになったのです。

高校の卒業式でクラスの総代に選ばれたのですが、舞台上で日本語でスピーチを求められたらどうしようと思い、自信が持てず、断ってしまいました。当日は成績で2番の生徒が総代をつとめ、卒業証書をもらうだけでスピーチはありませんでした。その時の後悔がずっとありました。

1 日本語能力試験は、公益財団法人日本国際教育支援協会と独立行政法人国際交流基金が主催の、日本語を母語としない人の日本語能力を認定する語学検定試験。最上級のN1からN5まで5つのレベルがある。

大学時代は勉強もアルバイトも頑張りました。高3の時からハンバーガーチェーン店でバイトをし、店長からマネージャーをやらないかと言われましたが断りました。しかし卒業式のことがあり、自分ができることはもう諦めないという思いで、大学1年でマネージャーになりました。そうやって少しずつ、チャンスをつかむようになっていきました。

●苦勞が報われたと感じる大学生ボランティアの頃

大学では日本語教育専攻だったので、実際に日本語を教える経験を積まないといけないということで、中学生の時に放課後に通っていた「国際交流ラウンジ」（以下「ラウンジ」）の学習支援教室で大学2年から1年間、ボランティアのサポーターとして中学生に日本語や教科を教えました。それがきっかけで、日本語教育といっても自分と関わりのある後輩や子どもたちのためにできることをしたい、それは自分にしかできないことなんだという思いができました。日本語がままならない子が日本語で英語や他の教科の勉強をするのですから大変です。私は学習支援教室の1期生として半年間勉強しましたが、その卒業式の時教室の先生が中国の歌の歌詞を配ってくれて、皆で先生方の前で歌いました。その時、日本に来て初めて「中国語でも私たちが認めてくれる場所があるんだ」と感じました。

大学2年からボランティアをしていた時期に弟がちょうど来日してラウンジで学んでおり、普段は仲が良くないのにそこでは他の生徒に「お姉ちゃんだよ」と私のことを話すのを見ると、誇らしかったのではないかと思います。私も生徒たちに「先輩、どうやって高校に入ったんですか？」「どうやってそこまで日本語が話せるようになったんですか？」と言われ、すごく頑張ってきたんだなと自分で初めて思うことができ、かつ人の役にも立てるようになって、頑張ってきたよかったですと思いました。

大学3年では卒論のためボランティアを休み、4年でラウンジに戻り、今度はアルバイトとして居場所づくりに関わりました。中学時代にお世話になった先生（今はラウンジの館長）から「高校生や大学生の居場所づくりを手伝ってくれないか」と頼られました。それまでは「中国人なのに日本語上手だね」と言われることがあっても、「望んで日本に来たわけでもない私が、どれだけ苦勞してきたか知らないでしょう」と素直に受けとめられない自分がいました。でも「ラウンジ」で子どもたちと接するうちに、これまで苦勞してきたことは自分にしかない経験だと気付かされ、自分のように、途中から外国から日本に来た子どもたちの役に立つことができると自分を肯定できるようになっていったのです。

●ラウンジにそのままアルバイトで就職

大学4年になり、進路を考えた時、日本の会社に入って人と深くかかわりながら仕事をするのは怖いと思いました。人間関係の部分で本当にできるのかなと。中学校から大学まで、部活やサークルには全く参加して来なかったんです。SNSは中国のサイトを見ているし、日本のテレビはたまに見る程度で、興味を持ってよく見た時期は長くはありませんでした。日本の若者が何に興味を持ち、どこで遊んでファッションは何が流行っているのか分からないので、そういった話ができないと関係づくりは難しいと思いました。

最初は中国に戻って日本語を教えるという道も考えていましたが、そのためには修士号があったほうが良いということで、大学院への進学も考え始めました。ちょうどその頃、外

国ルーツの「高校生や大学生の居場所づくり」のプロジェクトが開始され、私は自分と同じ境遇にいる外国につながる子ども・若者の成長を支える一人になりたいという意思が固まりました。ラウンジ館長の勧めで日本語教育研究科のある大学院を受けて合格しました。大学院修了後も「ラウンジ」でアルバイトを続けています。「ラウンジ」で働いていくなか、この仕事こそ自分のやりたいこと、自分だからこそできることだと意識したからです。月曜日から金曜日までフルに勤務しています。

仕事は楽しいですが、アルバイトという不安定な身分であることに対しては母や祖母から「お金にならないし、将来が見えないから、もっといい仕事を探したら？」と言われます。祖母は「中国にいたらおまえの年なら、収入の安定した男性と見合い結婚をして、仕事で稼いだお金を家に入れている。」と言いますが、私はそんな人生を歩みたくなかったのも、自分が頑張るしかないと思って日本語や勉強を頑張ってきました。すると少しずつ母は応援してくれるようになりました。仕事に対する自分の思い、頑張っている自分の姿を、母は見ていたと思います。今は一人暮らしをし、お金はたくさんありませんが好きな仕事で充実した日々を送っていると思います。

●母や祖母からの結婚プレッシャー

親の都合で来日し、言葉の面で苦労したことについては、親を責める気持ちがありました。でも食べる物や住む場所に苦労したことがなかったので、それだけでも感謝しなければいけないのだと今は思っています。両親は不仲で、経済的なことで苦労したこともありました。でも自分で変えられないことに悩んでも仕方がないので、私はラッキーなほうだと思えるようにしてきました。大学は、母が入学金は出してくれましたが、学費は日本学生支援機構の奨学金とアルバイト代で支払いました。奨学金は大学と大学院の2つ分を現在も返済しています。

中国では女子生徒の大学進学率は高く、中2まで過ごした福建省は今では女の子も大学に行くために勉強しますが、親やもう一つ上の世代では古い考えの人が多い地域だと思います。両親は進学等に反対することはありませんでしたが、祖母は、経済的に豊かな男と早くに見合い結婚することがいい、とたびたび言ってきます。恋愛には反対され、付き合っている人がいた時は母親との関係が険悪になりました。結婚までいかない恋愛は時間の無駄で、今恋愛するなら中国に帰すと言われ、かなり悩みました。

母や祖母が中国人とお見合いを持ってくるのですが、親が中国と日本にレストランを持っていて本人は専門学校を出て親の手伝いをしている人など。自分のやりたいことを頑張っている私とは価値観が合うとは思えず、断ると「自分を見なさい。あなたはかわいいの？ 人を選べるの？」と傷つくことを言われます。母と祖母は良かれと思ってお見合いを持ってくるので、その思いにどう応えようか悩んでいましたが、一緒に暮らしていると考え方の違いでぶつかるので離れようと、今は一人暮らしをしています。

●外国人差別

ハンバーガーチェーン店でバイトをしていると、私の名札を見て「日本人と替わって」と言われることがあります。高校の時は自分の日本語が下手だから仕方ないと思ってしまし

た。しかし、大学院の時、混んでいる店内で向かい合った客が「私、中国人嫌い」と大声で言い、店中がしーんとなりました。有名大学の院で日本語教育を専攻する私。日本語が上手になればこんな経験はなくなると思っていたのに。そこでこれは自分が悪いからではないと気づきました。こういう人は国籍に関わらずいるのだ、もう自分にプレッシャーをかけるのは止めようと思いました。

● “闘いの場” から “生活の場” へ

ラウンジで活動している高校生や大学生たちと、地域の人々とつながる機会を積極的に作ろうということで、地域の防災訓練や餅つき大会に参加しています。この夏はラジオ体操のチラシを中国語に翻訳し、掲示・配布などの活動を行いました。道を歩くと自分たちが翻訳したチラシが貼ってある、中国人から見ると中国語が貼られているのは、この町に住んでいるという親近感、実感が湧きます。

それまでは差別する人たちを見てきたので「日本人はみんなこうなんだ」と思っていました。日本人も「中国人はみんなこうなんだ」と思う人もいて、壁があったと思います。しかし皆で地域のイベントをやってお年寄りに「ジュースが余ったから持っていきな」などと言われると、日本人というより地域のおじいちゃん、同じ人間だと思えるようになりました。日本は私にとって“闘いの場”であり、“やりたいことを頑張る場”だったけれど、今は親近感を持って“生活する場”であり、“ただここにいていい場”に変わってきたのだと感じています。自分という人間がしっかりしていれば、どこに行っても楽しく過ごせる場となると思います。

● 私にできることは自分たちの現状を伝えること、私たち自身にできることをしっかりやっていきたい

外国人というと留学生や観光で来た人と思われがちですが、私たちのような外国つながりの子どもの存在はほとんど知られていません。父か母が日本で働いていて外国から呼び寄せた子どもたちは家族滞在ビザなので、学生支援機構の奨学金を借りることができず、進学を諦めざるを得ない人も少なくない現実があります。就労時間も週に28時間に限定されるため、アルバイトで学費を稼ごうにも足りず、親の仕事で大学の学費を捻出するのは困難です。人生を変えるために頑張っただけで大学に行こうとしても自分でできることは限られています。高校時代の中国人の友だちとは今も時々集まっています。仲が良い6人のうち大学に進学したのは私含めて2人だけ。あとはみんな働いていますが、フリーターが多く代わり映えのない毎日で、人生を変えたいけれどもどうしていいかわからない、どこに相談してよいか情報もないと聞きます。

● 一人の人間として納得できる人生を過ごすことが多文化共生社会のためになる

差別的な発言をされることもあります。それは国籍の問題ではなくその人自身（人格や性格）の問題だと気にしないようにしています。多様なバックグラウンドを持つ人がいるのだということを知ってもらうことが大切だと感じているので、4年前から職場で取り組んでいる、学習支援を受けた外国つながりの卒業生と一緒に居場所をつくり、後輩である外国つながりの子どもたちに何ができるかを模索しています。外国人としてでなく、1人の人間と

してやりたいことを見つけて自分が納得できる人生を皆にも過ごして欲しいと思います。
そうすることが多文化共生社会のためにもなることを分かってもらいたいと思います。

Bさん

●プロフィール

年齢	20代前半（中国生まれ）
国籍・在留資格	中国・家族滞在ビザ1年
来日してからの期間	小学校4年生～20年以上
横浜市への在住歴	在勤、市内の学習支援団体でボランティアとして活動
最終学歴	4年生大学
婚姻状況	未婚
同居者	父
就業状況	正社員
住まい	賃貸

●言葉がしゃべれず、お人形さんみたいになってしまった小学校時代

上海で生まれ育ち、小学4年生のとき母と2人、父の住む日本の地方都市へ引っ越してきました。父はいろんな国で仕事をして来た人で、年に1、2回しか上海の家には帰って来られませんでした。家族みんなで暮らしたいという願いがずっとあり、日本行きが決まりました。その都市がどこにあるのかもわからないまま、母と飛行機の中で日本語の読み方について書かれた本を読んでいたことを覚えています。そこは原発のあるところで、それまで暮らしていた上海に比べ、自然豊かで海も山もあり、いいところでした。

父は日常会話程度の日本語はできましたが、職場は中国人スタッフが多いところで、使う機会は少なかったようです。私は最初のころ、日本語に苦労しました。小学校ではクラスメイトが算数の勉強をしている時間に、私だけ1対1で日本語の特別授業を受けていました。算数は中国の学校のほうが進度が早く、自分でも得意だったので、授業を受けなくてもテストもできて、困ることはありませんでした。

もともと活発な子どもで、上海の学校では友だちも多かったんです。でも日本ではまるでお人形さんみたいに、無言で反応のない子になってしまった。本来の自分自身ではないことが悲しく、悔しかったです。もっといっぱい友だちとおしゃべりしたい。でもみんながしゃべっていることを聞くのに精一杯で、自分から話す余裕はありませんでした。1年ぐらいたって日本語に耳が慣れてからは、少しずつ話をするできるようになりました。それでも自分から話しかけることがない、静かでおとなしいイメージを演じるしかありませんでした。

それが嫌で、そういう自分を知っている人がいないところへ行きたいと思い、中学からはみんなとは別の学校に行きたいと思っていました。環境を変えたかった。そんな話を日本語の先生にしたところ、中高一貫校への進学をすすめられたのです。それから頑張ってたくさん勉強をして、親に黙って受験をし、地元の中高一貫公立校への入学を果たしました。日本語の先生には小論文等を居残りで教えていただきました。親に言わなかったのは、落ちたら恥ずかしいと思ったからです。

中学からはぶっつんで、明るく元気になりました。中学ではバスケット部に、高校の時は美術部に入りました。友だちもたくさんできて、楽しい学生生活でした。より自分らしくな

れるよう努力ができて良かったと思います。

●単身上京、大学に進学

高校卒業後は、東京の大学へ進学しました。医療系に関心があったので、(医学部ではなく)そういった学科のある大学を選びました。

大学時代、初めてアルバイトをしました。空港、レストラン、コンビニ、ファミレスなどいろいろな仕事をやって、週6日くらい働いていました。学費は親が出してくれましたが、家賃や光熱水費、生活費は日本学生支援機構の1種奨学金(無利子)とアルバイト代で賄いました。高校まではアルバイトができなかったのが、大学ではアルバイトやボランティアをたくさんやって楽しかったです。

ボランティアは横浜の「わたぼうし教室」で始めました。子どもたちに日本語を教えるお手伝いをしています。N県にいた時、週1回、外国人のための日本語教室にお世話になっていたんです。それまではサポートする側だったけれど、今度はサポートする側になりたいと思ったのがきっかけです。大学時代から始めて現在まで5年くらい続けています。「わたぼうし教室」にはいろいろな年代の人のためのクラスがあって、私は小学生のクラスを担当することが多いです。半数は中国人の子です。いまは保護者と連絡をとったり、今後の予定を伝えるなどのまとめ役もしています。

●コロナの影響を受けて考えた末、整体師として就職

大学卒業がコロナのまん延時期と重なってしまいました。私は持病があり、からだが強くありません。主治医から同じ病気を持つ人がワクチンを打って重症化した例があるので、ワクチンを打たないほうがいいと言われていたため、病院など医療機関での就職はしませんでした。病院で働くにはワクチンは必須だったことと、また病院で働くことに怖さを感じていたのも事実です。病院に就職する同級生が多かったのですが、私は就職活動の末、整体院で整体師として働くことになりました。正社員です。

人体の構造などは大学で学んでいたのが多少知識がありましたが、整体師としての技術はすべて就職後の研修で学びました。人と話すのはもともと好きだったし、人の身体に興味もあったのでいいところに就職できて良かったと思っています。元々すごくこの仕事をやりたかったわけではありませんが、大学時代にちょっと自分もサービスを受けたことがあり、病院以外の就職先をネットで調べていて、いいかなと思いました。

就職先には、ビザを含めて全て自分の状況を説明し、それでよかったら雇ってくださいという感じで説明し、何社か受けて外国人でも大丈夫、というところに就職しました。

女性専門なので、接客で嫌な思いをすることは今のところありません。1日8時間シフト制での勤務、月8日休みです。今は緊急事態宣言が出ている関係で、20時で閉館していません。お給料は、なに不自由なく暮らせて貯金もできる額をもらえています。この仕事は好きだし、ひとつの仕事はやり尽くしたと思うまでやるべきだと思うので、当分この仕事をやっていくつもりです。

●中国と日本と、どちらでも生きられるように

父が東京に転勤になった関係で、今は都内に父と二人で部屋を借りて住んでいます。母は一人地方都市の持ち家に残っています。母とは毎日 SNS で連絡を取り合っていて、週 1 日は電話で話しています。父とは生活時間帯が違うので食事はそれぞれが取る形です。

親からは「女の子だから〇〇しなさい」と言われたことはありません。今は女性も働くところはたくさんあるから、やりたいこと、好きなことがあれば積極的にやったらいいと言ってきて、東京の大学へ行くときも応援してくれました。親に恵まれたと思います。小学生の頃学校に行きたくないと思った時、親は「学校を休むのは簡単だけど、自分たちが中国に帰ったらあなたが頼れるところはないんだよ。知識を蓄えて資格を取って、人に頼らないで生きていけるように。」と言ってくれました。中国と日本のどちらでも生きられるように頑張れということだと思います。日本人ならば仕事を辞めてニートになっても生きていくことができます。でも私は仕事を失えばビザも居場所も失い、家族と離れ離れになってしまう可能性もあるので、いろいろな選択肢を持っておくべきだと思います。

ひとり暮らしをするまで、家事は皿洗いとか掃除しかしたことがありませんでした。家事はお小遣い制で、お皿を洗ったら 100 円、のような形でやっていました。

休みの日は家の近くにある整体に通っています。仕事で身体を使うことが多いので、疲れてしまうんです。接客術などをみて自分の仕事に生かしています。あとは、「わたぼうし教室」でのボランティア活動も続けています。

●在日 10 年以上なのに 1 年のビザ! 入管の対応には疑問

日本に住んでいて一番不便だと感じるのはビザ更新です。就職する際、家族滞在ビザから就労可能なビザに変更する必要があったのですが、その手続きが大変でした。入国管理局のホームページで下調べをし、職場が発行した内定証明書などの書類を揃えて行っても、ホームページの情報とは異なった資料や追加資料を求められてやり直しになり、3 回直したこともあります。今回は就職の内定証明書が必要で、その形式は問わないと書いてあったのに、提出したらそれではだめだと言われました。週に 28 時間以上働くことが記載されていないと家族滞在のビザでいいと思われてしまうそうです。働く時間と日数を書き込むように言われましたが、それなら初めからそう言って欲しかったです。何段階も審査があり、各段階で同じことを聞かれるし、問い合わせの電話もなかなかつながりません。相談できる人や頼れる人がいないことが一番つらいです。周りの外国人の人に聞いてもそう言われます。

最終的に就労可能なビザを得られましたが、1 年のビザしかもらえなかったのが、来年また更新手続きをしなければならず、気が重いです。ビザは申請時に 1 年、3 年、5 年から選べるとなっているのですが、実際は選べません。5 年で申請しても 1 年しか出してもらえません。今回は通らなかった理由を教えてくださいました。今までは学生で親が負担していたけれど、社会人になって家賃、保険、年金等全て自分で払えるかどうか分からないため、社会人 1 年目はビザが 1 年だけしか出ないそうです。それなら初めからそう言ってもらいたいと思います。

●自分をしっかりもって前を向いていくしかない

親も何回かビザの資格変更を試みましたが、申請の度に「今回はだめでした」というような回答で、なぜだめだったのか分かりません。最終的に弁護士に相談して初めて分かったことがあまりに多くて驚きました。10年は無駄にしたと思います。

私がした苦労を後輩にさせたくないので、「わたぼうし教室」ではビザ更新手続きに関して後輩たちに情報共有するようにしています。何か月も前から準備するんだよ、とか。

いざという時に頼れるのは、現在のところは親だけですね。親に話しても気が楽になるくらいで、問題解決にはなりません。結局、嫌なことに向き合うのは自分だから、自分をしっかりもって前を向いていくしかないと思っています。

●どんなことでも話せる場が欲しい、相談できる相手になりたい

ひとりで頑張ってきたので、人に甘えることは難しいです。日本に来てからずっと孤独を抱えてきました。他人に悩みを相談することはありませんでした。だからこそかつての自分のような、外国人の子どもたちのために役に立ちたいという気持ちが強いのだと思います。日本語を教えて下さった先生やボランティアの方々は、絵を描いたり、英単語まで使って頑張らせて教えて下さいました。でも話題は勉強のことで生活や友人関係などについては尋ねられたことがないし、話せる雰囲気でもありませんでした。だから自分は後輩の子どもたちに、友人関係や困ったことがないか、勉強以外の話を聞くようにしています。相談できる相手になりたいです。子どもたちに会いに行くことで、自分の息抜きの場にもなっています。

今回のインタビューを受ける時、「わたぼうし教室」の方からの勧めもあって初めてビザについての苦労をお話しました。

自分だけで頑張ってきましたが、もし誰かいたらもっとたくさんの情報が得られるし、助かると思います。「なんでもいいから話を聞くよ」「どんなことでも話してね」と言ってくれるだけで心の支えになります。今までそんな場はありませんでした。生きていくのに精いっぱい「頑張ってるね」と言ってくれる先生はいましたが、頑張るのが当たり前、今はやらなきゃ、とっていました。

●日本人と外国人が地域で触れ合う機会がもっとあれば

地域の人と触れ合う機会が少ないとも感じています。小中学生のうちは学校を通じて地域の人と知り合う機会があるけれど、就職するとまったくありません。そういう場所があるといいと思います。外国人支援も同じで、学校につながっている間はいいいけれど、そこから出ると難しくなると感じます。日本人と外国人が交流する場がもっとあったらいいですね。文化や食生活などに慣れるのには時間がかかります。地域の特産物や歴史などを知らないなので、そういうものを紹介してくれて地域の方と触れ合える機会があったらいいなと感じています。

Cさん

●プロフィール

年齢	20代後半（中国生まれ）
国籍・在留資格	中国・永住者
来日してからの期間	12歳～現在
横浜市への在住歴	10年
最終学歴	4年制大学
婚姻状況	既婚
同居者	夫
就業状況	正社員
住まい	持ち家

●両親に会うため来日

12歳の時、中国の小学校を卒業した後、来日しました（中国では6月卒業、9月入学）。両親が日本で働いていたので、弟と2人、夏休みを利用して親に会い、観光する目的で2ヶ月で帰る予定だったんです。でも日本で過ごすうちに、このまま家族4人、日本で暮らしたいという思いが出てきてそのまま帰国せず、現在に至ります。

父と母は仕事のため、私が幼い頃からずっと日本にいます。私と弟の面倒は父方の祖父母がみてくれました。祖母に、自分で何でもして自立できるよう育てられたのでしっかりしていて、小学校では学級委員もやっていました。父は若い頃から日本に留学したり数回働きに来ていて、母も日本で働いたほうが稼げるということで来日したのだと思います。父は工事などの仕事で、母は中華街でパートをしています。2人とも日本語は問題なく話せますが、読み書きは得意ではありません。

●中国人のクラスメイトに助けられて

私は9月から日本の中学1年生に転入するかたちで学校生活を開始しました。横浜市中心部の市立中学で、中国人が多く通っていました。1学年3～4クラスのうち1クラス5、6人は外国人がいたのではないのでしょうか？ だからわからないことがあれば、中国人のクラスメイトに尋ねたり、通訳してもらえばよかったので助かりました。担任の先生も座席を通訳できる子の隣にしてくれるなど、気をつかってくれました。今も仲良くしている親友がいるんですよ。

国語など、理解できない授業の時に所属するクラスから離れ、国際教室で中国語がわかる先生から日本語を習いました。最初は週5回ほど国際教室でしたが、慣れてくると週3回、1回、そして無しになりました。定期試験の時はクラスをまわっている国際教室の先生が近くにきた時に、わからない文章をまとめて聞いて通訳してもらいました。外国人の生徒が多い分、いろいろな配慮があったと思います。学校から親へのプリントは、国際教室の先生が中国語に訳してくれていました。

国際教室以外にも国際交流ラウンジに週1日ほど通って、勉強を見てもらっていました。残念だったのは、私の日本語の問題もあるけれど、日本人のクラスメイトと話したり、友だ

ちになつたりする機会が少なかったことです。中国人が多い分、固まってしまうし、日本語の勉強を頑張って日本人の友だちをあえてつくる必要がなかったという理由が大きかったです。ですがもし中国人のクラスメイトがいなければ、日本語が分からなくてもっとひどいことになり、高校で頑張ることはできなかったと思います。

差別やいじめはありませんでしたが、外国人の男子は日本人のグループにやられていました。呼び出されて殴られたこともあったそうです。国籍が理由なのか、中学生という年代によるのかわかりませんが、そういう話を聞いて怖いと感じていました。が、今振り返るとどこにでもあった話なのかもしれません。今は外国つながりの子が増えているので、日本人が外国人をいじめることは減ってきているのではないのでしょうか。逆に日本人同士、外国人同士のいじめは増えているかもしれません。派閥ができています。

●成績がぐっと上がった高校時代

高校は日本語能力の関係で公立高校は難しいから私立に行ったほうがいい、頑張れば奨学金もあるからという先生のすすめで、東京の私立女子高に進学。奨学金がもらえましたがそれほど学費が安くはならず、公立より高かったと思います。高校はものすごく楽しかったです。中国人は私一人だったので日本語を頑張って覚えて、日本人の友だちがたくさんできました。自分の日本語で友達ができたのが嬉しかったです。その子たちとは放課後にいろんな場所に遊びに連れて行ってもらいました。

私は小学校までは勉強が得意で成績もいいほうだったんです。でも日本に来てからは言葉の問題で成績表も1や2ばかり。でも高校からは生まれ変わったつもりで頑張ろうと努力を重ね、成績表も4や5ばかりになりました。英語だけは3でした。成績が上がったのは学校の先生に教えてもらったり、自分で頑張ったからです。英語は国際交流ラウンジで習っていたボランティアの先生にご自宅にうかがって1対1で教えてもらいました。すべてボランティアでしてくださって、本当にありがたいことだったと感謝しています。

成績がよかったこともあり、大学は指定校推薦で私立の4年制大学、日本文学部へ進学しました。敢えて日本の文化を勉強して自分に圧力をかけようと思いました。高校の時、古典は日本人も分からないのでスタートが同じだと気づき、古典の先生がイケメンだったこともあり古典が好きでした。卒業論文は日本文学と中国が関係する部分を扱ったので、漢文など中国語を活かせる場面もありました。

高校時代からダンスに憧れて大学ではダンスサークルに入ったのですが、夜11時から夜中の4時まで都心で練習があり、家に帰ってお風呂に入りすぐに学校に行く生活で、授業中殆ど寝ていました。何のため大学に来たのか分からないと思い、2年生からはサークルを辞めて勉強に集中しました。

●就職そして結婚

卒業後は中国語と日本語を生かし、国際的な仕事がしたいと思っていました。就活はなかなか大変で、日本語がしっかりできていない部分があり書類で落とされることも多く、自分で自信を持って言えることも少なかったんです。ネットで会社を探して受け、2社から内定が出ましたが、ネットの評判などから判断し、今勤めている商社への入社を決めました。将

来的には国際関係の部署で働ける可能性がある会社です。

仕事はなかなか大変です。営業総合職として働いていますが、専門的な商材を扱っているので知識も必要になります。全国転勤もありますが、先輩を見ていると女性はそこまで遠方に異動しないようです。同期は37人、うち半分が女性です。ディーラーに商品を紹介したり、ディーラーの依頼で客先に商品を紹介します。大小さまざまな商材を扱うので、毎月新しい商品が出てきて大変です。残業は月に40時間未満になるようにしていますが、朝9時から20時くらいまで働き、たまに23時や24時の時もあります。忙しい時は訪問先が次々にあるので食事をするひまもありません。先輩や同僚との関係はいいほうだと思います。先輩には仕事のことをいろいろ相談できますし、私も入社4年目になり、OJTで後輩を指導する立場になっています。

つい最近、結婚しました。相手は中学時代の中国人の同級生です。ずっと連絡を取り合っていて、付き合い始めたのは2年ほど前です。私の夫は日本語の問題があり高校は私立を勧められましたが、聞かずに勉強を頑張り公立高校に進みました。日本語ができない外国人の生徒が公立高校に進める制度や情報がもっとあるといいと思います。彼は私立4年制大学を出た後、IT関連の会社の正社員として働いています。私の実家から徒歩5分くらいの場所に35年のペアローンで二人で一戸建ての家を買いました。実家は私が大学1年の時に両親がやはりローンで購入しています。今はいろいろなことにわくわくしていますが、以前のように好きにお金は使えません。夫が在宅勤務ということもあり、積極的に家事分担をしてくれます。

●親との関係

中国の出身の福建省は保守的な人が多い地域ですが、両親は早くから日本に住んでいたせいか、進歩的な考えを持っていると思っています。子どもが日本に来る前離れて暮らしていたことで申し訳ない気持ちがあったのか、日本に来てからは良くしてくれました。私がやりたいということはいつも応援してくれましたし、女の子だからこれをしてはダメと言われたことはありません。こうして成長できたことに、親には感謝の気持ちでいっぱいです。

私は進学や就職などの相談を親にしたことがないんです。いつも決まった後に報告してきました。親は日本の教育システムがわからないので、相談してもちゃんとした答えが返ってこないと思っていたし、心配をかけたくないという意識が強かったのだと思います。そのことをつらいとか、もっと甘えたかったのと思ったことはありません。両親は永住権を持っていて、私も来日数年で永住権を取得しました。

●日本語学習の支援が必要

私が子供のころは今に比べ、外国人が少なかったので、日本語学習などで今よりも手厚いサポートが受けられたのではないかと思います。国際交流ラウンジでは以前はどこの学校の生徒でも学びに来て良かったのですが、今は人数の関係で限られた学校から、その中でも選ばれた子どもたちしか学ぶことができないと聞いています。理由は外国人が増えて学びたい生徒が以前より多いのとは逆に、日本語ボランティアが減っており、手が足りないからだそうです。これでは私が高校の時に受けたような、きめ細かい支援は受けられないだろ

うと思います。でもボランティアだけに頼るのには限界があるでしょう。私が国際交流ラウンジで手伝った時は、来たくても来れない子の話や、勉強しに来ているけれど親がまだ帰宅していないので家に帰れない子の話をよく聞きました。ラウンジでは学習支援は1人週に1回受けられます。学習支援教室自体は週に3回開催していましたが、現在は週に1回だけになっているので受けられる人数はかなり減っています。ラウンジに来られない子たちはどうすればいいのでしょうか。やはり国を含めたサポートが必要ではないかと感じています。

●親が家にいない、大学に行かれない子も

私はほとんど困らずにやって来られたので、他の外国人の人が何に困っているのかよくわからないところもあります。男女共同参画センターのようなところが関心を持ってくれるのはいいことだと思うのですが、家庭の中の問題は手に負えないのでは？と感じることがあります。親が忙しすぎていつも家にいない、子どもの世話ができない家族が多くあるし、子どもが良くない方向に行ってしまうこともあります。私の友達は家に帰っても誰もいないし、ご飯も用意してありませんでした。私の家では学校から家に帰ると両親どちらかが必ず家にいてくれて、ご飯を食べさせて宿題の監督をしてくれました。夫婦でうまく分担できていて、父は子どもが日本に来るまでは1度もご飯を作ったことはありませんでしたが、子どものために作るようになりました。

外国人の親は日本語ができないと労力を使う仕事しかないし、賃金が低いから家にいたくてもたくさん働かなくてはならない、という辛さもあります。こういった家庭内のことは人が口をはさみにくいです。ビザの種類により制限があり長時間働けないから困っているということもよく聞きます。永住権が無いと住宅ローンも通らないのではないのでしょうか。大学などに行きたくても経済的に行かれない子どももいると聞きます。こういうところはもう少し何とかなったらいいなと思いますね。

Dさん

●プロフィール

年齢	20代後半（フィリピン生まれ）
国籍・在留資格	日本
来日してからの期間	10か月～12歳、19歳～現在
横浜市への在住歴	10年以上
最終学歴	フィリピンの短大
婚姻状況	既婚
同居者	夫（永住者）、子ども2人、母、弟、妹
就業状況	正社員（育休取得中）
住まい	賃貸

●子ども時代～日本で育ち、中1からフィリピンへ

フィリピン人の母、日本人の父の子として、フィリピンで生まれましたが、生後10ヶ月で来日。横浜市北部で育ち、小学校から中1までを日本で過ごしました。自分が日本人とは違うということは、物心ついた時からわかっていたのですが、そのことで嫌な思いをしたことはありません。小学校に入ったころ、ハーフということで男子にからかわれるようないじめに遭ったことがありましたが、気にしない性格だったのでいじめはすぐ終わりました。日本名の中に西洋風のミドルネームも入っているので目立ちました。しかし妹の友人にはハーフが増えてきて、今はハーフはカッコいいと思われるので時代は変わったんですね。

中1の時、フィリピンの文化や宗教を知って欲しいという母のすすめで、日本に住んでいたおば（母の姉妹）と一緒にフィリピンに行き、親戚のところでおばと共に暮らしました。日本の家庭内では日本語を使っていたので、タガログ語も英語もまったくわからず、フィリピンに行った直後は辞書を指さして意思を伝えるような状況でしたが、おばは「歌を歌っていたらなんとかなるよ」と言ってABCの歌などを教えてくれるぐらいでした。フィリピンでは幼稚園から英語を学ぶんです。でも日常会話はフィリピン語です。でもすぐに馴染んで3ヶ月くらいで言葉をだいぶ理解できるようになりました。

当初は1年だけのつもりでしたが、友だちもたくさんでき、とても楽しかったので、短大を卒業する19歳までフィリピンで暮らしました。いっしょに行ったおばは1年で日本に帰ったため、他のおばに面倒をみてもらいました。母は9人兄弟で従兄弟だけでも70人くらいいるんです。皆、マニラ近郊に住んでいて行き来があったので寂しいと感じることはありませんでした。進学した短大ではプログラミングを学びました。数学が出来たから短大に受かったのだと思います。フィリピンでは日本人扱いされました。フィリピン人より目が小さいのがかわいいらしく、モテていました。

●両親の離婚

短大卒業後、母から「日本に戻って手伝ってほしい」と連絡があったので、日本に帰ることにしました。母は私が17歳の時に父と離婚しました。それで経済的にも精神的にも心細かったのかもしれませんが、4歳下の妹と6歳下の弟はちょうど反抗期で母の言うことは聞か

ないけれど、私の言うことは聞くという感じがあったので。

父は離婚後すぐに再婚したのですが、その奥さんは23歳で私と4歳しか変わらない若い女性でした。今ではその奥さんと父との間にできた子どもたちとも頻りに交流があり、誕生日会などもして、クリスマスプレゼントは毎年ねだられます。だからママ友感覚で話をするなど親しくしているんですよ。

今も父やその新しい家族と仲がいいのは、私の母のあっけらんかんとした性格によるところが大きいのだと思っています。大学の入学金など、いざという時にまとまったお金を出してくれるので父はいいと思います。でも養育費などの取り決めはしていません。「新しい家族がいるんだからお父さんも大変」というのが母の考え方のようです。私たちは、離婚を機に隣の区へ引っ越しました。

●日本で再び短大へ

帰国後はアパレルでアルバイトを始め、4年間やりました。中1から日本を離れていたで、日本語をかなり忘れてしまっていて、最初は接客に戸惑いましたが、店長からまじめにやっていたら話せるようになる、話した方がいいと元気づけられ、接客用語を丸暗記して頑張りました。接客業はいいのですが店長がすぐ変わり、人によっては外国人が苦手な人もいるので、友人に勧めても落ちてしまうこともあります。

毎週土曜日にME-net（認定NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ）のボランティア日本語教師の先生がやっているクラスに手伝いに来ないかと言われ、そこで日本語を勉強することになりました。その甲斐あって県立の情報系短大に進学。短大に通っていた時も夜8時ごろ先生が私の家に来て勉強をみてくれました。のちに結婚する夫も先生から日本語を習っていて、毎週先生の車が迎えに来てくれていました。短大はシングルマザー世帯の子どもが入学する場合、成績さえ保てれば授業料が免除されるという仕組みがあり、そういった情報もすべて先生が調べて教えてくださいました。この短大でもプログラミングの技術を習得したのですが、私は画面を長時間見ていると頭痛が起こってしまい、プログラマーなどの就職は向かないと考えていました。

そんな時、SNSで私の経歴を見たという人から銀行での就職を紹介されたのです。海外送金部門を立ち上げ、フィリピン人を大量に雇ってコールセンターを作ることになった。そのマネージャーとして仕事をして欲しいというものでした。銀行には3年ほど勤めましたが、上司と反りが合わず、退職しました。

●フィリピン人夫とともに二世帯で暮らす

26歳の時に結婚し、子どもが二人います（1歳と3歳）。夫は1歳年下です。夫のお母さんと私の母は親友でもともと家族ぐるみの付き合いでしたが、日本語を習っていた時、勉強が終わってから友達と遊びに行くと仲良くなりました。夫は両親ともにフィリピン人ですが、お母さんが日本人と再婚して夫を養子にしたため日本の永住権を持っています。夫は12歳までフィリピンで育ち、私と行き違いで来日し、今は家電量販店の倉庫で契約社員として働いています。事務より体を動かす仕事のほうが合っていると夫は言います。

夫は日本語が得意ではありません。日本語ボランティアの先生のお陰で高校に進学しま

したが、日本語が難しく勉強についていかれず、中退してしまっています。ボランティアの日本語の先生にいくらみていただいても、勉強するのは本人ですからね。フィリピンは小学生から留年制度があり、点数によって決まってしまう。いろいろな年齢の子がクラスにいるのですが、日本にそういった制度はありません。夫は日常会話はできますが、ニュースで聞く日本語はあまり分かりません。私は小学校卒業まで日本にいて、フィリピンに行く前に1週間だけ中学1年を経験しましたが、中学校の教科書を見て字が小さくてとても難しいと思ったのを覚えています。

銀行を辞めてから結婚、出産をして、一人目の子どもは夫の母や父の妻にみてもらったりしました。就職先を探していたのですが、就職するにしても子どもの預け先がなければ働けないということで、保育園入所の手続きをするために市役所に行く途中の道で、保険会社の人から営業職員として働いてみないかと声をかけられました。保険を販売するための試験に合格すればできると言われ、漢字が不得意だと言ったのですが私のことを日本人だと思ったようで、大丈夫と勧められました。私もやってみようと思い、頑張ったところ合格し、その会社に入社しました。ところが入って2~3か月で妊娠し、産休、育休に入りました。だから保険の販売はまだほとんど経験していません。来年復職予定です。

今は駅から徒歩20分くらいにある賃貸住宅で2世帯で暮らしています。妹は医療事務の派遣社員、弟は調理師の専門学校を卒業後、寿司職人として働いています。それぞれが毎月5万円ずつ家に入れるという形で私が家計を管理しています。どうしてもやりくりできない月は夫の給与から多めに支出してもらっています。

母(50代前半)は、日本がバブル期に20歳くらいで来日、父と出会って23歳くらいで私を出産しました。今は食品のピッキング工場で働いています。ヘルニア持ちです。コロナで派遣の人が減らされて仕事量が3人分になり、残業すればするほどお金はもらえるようですが、年齢のこともあり、大変そうです。母はフィリピン人の友だちがたくさんいるので、そこでのネットワークで仕事を紹介してもらうことが多いようです。夫はコロナ禍で注文が増え、忙しくなりました。

●外国人が安定した仕事に就くことは難しい

頭痛持ちなので通院していますが、それ以外はとても元気に過ごしています。具合が悪いときは、市販薬ですませます。ストレスがたまると家族に話します。家事は皆で分担していて、妹は皿洗い等するし、子どもの世話は全員で、その時空いている人がやります。

将来も日本で暮らしたいと考えています。夫と母も同じ意見です。食品工場のような仕事は緊急事態宣言が出ると仕事が減らされるので、夫の母は最近フィリピンに帰りました。フィリピンは感染状況は良くないのですが、きょうだいが多いと仕事をしなくても生きていけるんですね。私も仕事に疲れて休みたくなったらフィリピンに住みなよと言われていきます。逃げ場ですね。日本のほうが年金などシステムがしっかりしているし、区役所に行けば職員の人が助けをくれたり、何かを勧めてくれたりします。育休にしても、フィリピンではお金は出ないですね。年金も個人で入れれば出るけど。フィリピンはたまに遊びに帰ればいいという感じです。

私がか子どもの頃、母は日本語は話せても宿題や勉強をみることはできず、父も勉強を教え

るようなタイプではありませんでした。学校のプリントは父に出してサインなどはしてもらいました。日本では日本語の読み書きや漢字ができないといい仕事が見つかりません。母も含めて日本で長く働いているのに、安定した仕事に就けない人が多いです。外国人が正社員やオフィスワークなど、いい仕事に就くのは難しいと感じています。ひらがなが書けるか、漢字が分かるかと面接で尋ねられ、フィリピン人の友人は傷つくと言います。分からない漢字もあるけど、教えてくれれば分かるのに。書けない漢字も意味は分かるので、そのうち書き方も覚えられるに、と思います。夫のように中途半端な年齢で日本に来ると、日本語の勉強が追いつかないので正社員になることは難しいです。

母や夫の母が病院に行く時、私は通訳を頼まれていっしょに行きます。夫は医師が言っていることは分かるのですが、どうせ分からないだろうと思って細かく説明してもらえないので、夫が病院に行く時は私もついていきます。夫は書類に関することは全て私に持ってきます。日本語ボランティアの先生の前で勉強したフィリピン人の子たちが近所に住んでいるのですが、書類が分からないとやはり私のところに持ってきます。中学生くらいで日本に来る人が多いので、日本語の習得、就職が難しくアルバイトの人が多い。高卒でも工場アルバイトの人が多いです。私のようにアパレルショップでアルバイトした人は少ないです。アルバイトはすぐに首を切られるというわけではないけれど、休んだら休んだ分給料が無くなるので、病気になれません。結婚はフィリピン人同士が多いです。

●悩みは話さないほうだが、話されることは多い

悩みは人に話さないほうですね。逆に人から悩みを相談されることは多いです。私からは連絡しませんが、急に尋ねて来たり連絡してくる人たちはいます。外国人はもっている情報がとても少なく、年金や育休のお金もそうですが、いろいろな仕組みやシステムがあるのに知らされないの、あることを知らない人が多く、日本は親切なのかそうでないのかわからないと友人は言います。保育園は仕事が無いと入れないのに、どうやって仕事をみつけていいのかわからない。情報が無い。だから友人の紹介でみつけることが殆どです。夫のように中途半端な時期（小学校終了以降）に日本に来る人の日本語支援や、外国人へのいろいろな情報の提供などをもっと充実して欲しいと思います。

Eさん

●プロフィール

年齢	20代前半（フィリピン生まれ）
国籍・在留資格	フィリピン・家族滞在ビザ1年
来日してからの期間	14歳～現在
横浜市への在住歴	中学2年～高校3年、大学卒業後～現在
最終学歴	フィリピンの4年制大学
婚姻状況	未婚
同居者	両親、妹2人
就業状況	正社員
住まい	親の持ち家

●日本語を話すのは苦手

来日時は中学2年生。エンジニアの父は長年日本で単身赴任していましたが、東日本大震災で不安になり、家族の来日を希望。カタルの仕事のオファーもありましたが、母が日本は四季があって美しく、フィリピンに比べて治安や気候がいいと言って私たちを説得し、来日することになりました。フィリピンでは母方の親戚が固まって同じ地所に住んでおり、母と姉と私と妹でひとつの家に住んでいましたが、親戚の助けの他、家政婦も雇っていました。

姉は医学部の大学生だったので、一人フィリピンに残り、母親と妹二人で来日。横浜市立中学校に入りましたが、言葉はまったく通じない。フィリピン人のクラスメイトがいたので、助けてもらいました。国語と社会科の授業の時はクラスを離れ、国際教室で日本語を勉強しました。国際教室には4人から6人くらいいました。他にも夏休みや週末に国際交流ラウンジや、母の友人に勧められたユッカの会で日本語を習いましたが、参加者が多く、会話をする機会は少なかったです。シャイな性格もあり、日本語で話をするには苦手意識があり、今も会話はほとんどがタガログ語か英語です。妹たちも共にユッカの会で勉強しましたが、私よりも小さい時に来日したので日本語は上手です。

高校入試は来日して3年以内の外国人向けの特別入試で受けました。日本語、数学、英語の3科目だけで、日本語の面接は中学で練習しました。英語で応答を考え、国際教室の先生に和訳してもらい、それを暗記して県立高校に入学しました。外国人の学生が多い学校で、日本語がペラペラなフィリピン人の友だちといつも一緒に過ごして助けてもらいました。

中学、高校とも部活や課外活動は一切やっていません。担任の先生から「まずは日本語習得が先」と言われたし、自分でも言葉が通じないのに楽しめるとは思わなかったから。

●言葉が通じないことによる差別も

中学、高校とずっと孤独。日本語が話せないことで周囲とコミュニケーションが取れず、フラストレーションが溜まっていました。日本語ができないことでいじめられたことはありません。中学に編入した直後はクラスメイトも積極的に話しかけたり、世話を焼こうとしてくれましたが、言葉が通じないことでそういう機会も減っていき、孤立していきました。高校の時、友達と英語やタガログ語で話をしていると「なんで日本語を話せないのに日本に

いるんだ」というようなことを男子からボソッと言われたことがあります。

でも一番イヤな思いをしたのは高校 2 年生でハンバーガーチェーン店でアルバイトをしていた時です。日本語を話せないと「なぜここで働いているのか?」「日本人と話したい」と言われることがあり、最初はショックでした。しかし仕方がない、こういう人はいるものだ、気にしないようにしようと思い、この時の経験で、どうやって他の人とやっていくかを学ぶことができたと思います。その後一人でマニラに暮らすようになった時や、今働く上でも役に立っていると感じます。

●大学時代はフィリピンへ

高校卒業後はマニラにある 4 年制大学へ進学。フィリピンを選んだのは、学費が日本より安いことと、高校の成績では自分が望む日本の大学の学部への進学が厳しかったというのが主な理由。一人暮らしは初めてだったので、最初の数ヶ月はとても寂しかったです。でも大学で友だちが出来てからは、居心地の良さを感じるようになりました。日本とフィリピンでは人がどう行動してつきあうかという文化がとても異なるので、はじめはどのように行動したらいいのか分かりませんでした。日本では人と会ったら遠慮しますが、フィリピンは気兼ねしないので圧倒され、でも憧れました。中学と高校の時は、日本語で言いたいことをどう言えばいいのか分からなかったのでフラストレーションがたまっていたのですが、大学では自分を表現することができて楽しかったです。大学ではマーケティング等を学び、卒業。就職先を考えていた時、コロナが蔓延し始め、フィリピン政府の対応に不安があったことと、仕事を見つけるのが大変だったため、日本に戻りました。

マニラは治安があまり良くないイメージがあるので、親は心配して大学の時始終、私がどこにいるのか確認していました。そのため母親は私に日本に帰って働いて欲しかったようです。大学は楽しかったけれど、マニラに住むのはあまり好きではなく、良い仕事に就くならマニラにいなければならなかったということもあります。

●きびしい就活と将来の希望

日本では大学で学んだ知識を生かした仕事を探しましたが、日本語が出来ないことがネックになり、就職先が決まりませんでした。母親が友人から聞いてハローワークに自分で行き、そのビジネス日本語クラスや、ボランティアのビジネス日本語クラスに 2 ヶ月通い、履歴書の書き方などを覚え、国際的な英語学校に就職し、3 歳から未就学児クラスで英語を教えるようになりました。

仕事は 11 時から 20 時で週 5 日勤務、月給は 25 万円ほど。教えた経験がないにしては、始めとしてはいい額だと思います。コロナ禍なので、おもちゃなど子どもが使う物や場所をこまめに消毒しなければならないことが大変です。

英語講師の世界では、イギリスやアメリカのネイティブ講師はフィリピンや日本人バイリンガル講師よりも給料が良く、公平ではありません。日本では保護者は、ネイティブの講師とフィリピン人や日本人バイリンガルの先生から選べるとすると、アメリカやイギリスの講師を選びます。アクセントなどのこともあるのでしょう。高校の時も生徒は特に白人の先生に惹かれたり、来ると興奮していました。ネットでもこういったことを読みます。これ

は自分では受け入れなければいけないことだと思っています。ですが職場の小さい子どもたちはそんなことは気にせず、楽しめればいいという感じです。

小さい子どもが好きなので、今の仕事は気に入っているけれど、子どもはエネルギーいっぱいだからついていかれないと感じることもあります。大学でファシリテーションやディスカッションを学んだ時、とても楽しかったので、将来は大学で英語を教えたいという夢があります。そのためには大学院で学位を取る必要があると感じています。貯金もちろん、日本語の勉強をもっとしなければならないですね。

●ビザ更新はストレスだらけ

両親とも日本語はほとんど話せませんが、教会内の世界的な組織の支部に入っていて、たくさん友達があります。母は少しだけアルバイトしたことがありますがずっと専業主婦で、教会のフィリピン人の友だちがいるので孤独を感じることは少ないそうです。この先もできるだけ長く日本で暮らしたいと考え、妹たちが転校しなくてすむよう、両親がローンで近くに住宅を購入し、長年住んでいた区から別の区へ引っ越しました。私が再来日し、一緒に住み始めたので家が手狭になったということもあるんですけど。

初めに来日した時、両親から日本語の習得を期待されたことについては、不公平だと感じていました。父親は長年日本で仕事をしていたのに関わらず日本語ができませんが、私たちには若いからと来日して2~3年で流暢になると思っていました。どこかに行った時など、親が私たちに日本語で交渉するよう頼んできましたが、あまり話せなかったのが辛かったです。そのため親はいつも、学校で子どもたちがどうしているのか心配していました。思春期だったこともあり親との関係はずっとギクシャクしていましたが、マニラでの一人暮らし期間は年に2度くらいしか親と会わなかったのが、再び一緒に住むようになった今は親との関係は良くなっていると感じています。母は要らないというけれど、月給から家賃等のために7万円を自宅に入れてあります。そうすると気持ちよくいられるからです。姉が医師になるのでそれと比較するとプレッシャーを感じますが、今は親は私が自立して仕事を楽しんでいればいいと思ってってくれています。仕事から帰ってきて疲れていると、楽しんでいるか、辞めたくないかなどと聞いてくれます。

父は最近、特別永住権を取得しました。私と母、まだ学生の妹たちは家族滞在ビザのまま、週に28時間しか働けないはずですが、私には就労制限はないので無制限で働くことができます。

ただ以前は3年単位で出ていたビザが、フィリピンから再来日した後は1年半程度しか出ていないことについては強い不満を感じています。ビザ更新の手続きは本当にストレスです。ホームページで見て書類を用意していても、そこに書いていない書類を追加で出すように言われ、再度出向かなければならないということが1回の申請に数回あることもあります。

●役所や病院で通訳・翻訳を頼めなくて困ること

以前お世話になったユッカの会でまた日本語を教えてもらうことになり、現在は週に1度くらいお願いしています。先生により今はオンライン授業をしてもらえます。

市役所などに出向いた際、英語が通じる職員が少ないことで苦勞することが多いです。国際交流ラウンジなど、行政のやっている翻訳ボランティアを利用することもできるのですが、個人情報の観点から重要書類の翻訳を頼めないことや、翻訳してもらえる文書が決まっていることに不便を感じます。母の友人は雇用契約書や婚姻届なども断られていました。また、私的な文書も翻訳してもらえないそうです。また、健康保険などの基本的なサービスについての説明の翻訳も欲しいと思います。市役所に提出すべき書類が理解できない時、市役所に翻訳してくれる人がいないと困ります。最近、親の年金の手続きに出かけましたが、役所の窓口で英語が通じなかったので、授業中の妹を電話で呼び出して通訳してもらわねばなりませんでした。妹はかなり嫌だったと思います。

病気になった時は、英語ができる医師がいる総合病院に通っています。最近父が胃腸系の疾患で別の病院に入院しましたが医師が英語を話せなかったため、妹が電話で通訳しました。こんな具合なので、これからはずっとこの総合病院に通い続けることになると思っています。

高校卒業後、日本人の友だちとは連絡が途絶え、今はほとんどいません。妹たちは私よりも幼くして来日したので日本人の友だちがいます。フィリピン人の友だちは数人いて、コロナ禍前は一緒にモールに出かけたり映画を観に行ったりしていました。地域に住んでいる日本人と話す機会はありませんが、中高生の時お祭りに行ったことがあります。

●日本語習得が大切

日本で外国人が仕事をするには、日本語能力試験 N2 以上またはネイティブレベルの日本語が必要になることがほとんどです。大学卒業後日本に帰って来た時、漢字をほとんど忘れていたことに気づき、勉強をし直しており、今は日本語能力試験 N3 受験のために勉強しています。もっと日本語を勉強しようと思うのですが、仕事をしているのであまり時間がありません。職場ではほとんどの同僚が英語で会話するので、日本語の会話を練習する機会がありません。日本語のオンラインレッスンを役所などが提供してくれればと思います。

職場では日本人バイリンガルの同僚が感じが良いので困ることはありません。悩みがあれば、高校の時仲の良かったフィリピン人の友人に相談します。職場は国際的な企業なのでハラスメントなどの問題はなく、自分自身経験ありませんが、日本では職場でジェンダーに関わるハラスメントの問題があるとネットで知りました。両親は何でも希望したことはやらせてくれ、女の子だから制限を受けたことはないと思います。

Fさん

●プロフィール

年齢	20代後半（日本生まれ）
国籍・在留資格	日本
来日してからの期間	生まれてからずっと
横浜市への在住歴	10年以上
最終学歴	フィリピンの短大
婚姻状況	未婚
同居者	母（5年ビザ）
就業状況	アルバイト
住まい	賃貸

●日本人の父とフィリピン人の母、そして両親の離婚

日本で生まれ育ちました。母は私が生まれるだいぶ前から日本で働いていました。一人っ子です。父は日本人ですが、私が小1の頃に離婚しました。それからは母一人に育てられました。離婚した時、母はどうしてフィリピンに帰国しなかったのか聞いたことがあります。そうしたら母は「フィリピンのほうが学費などは安く済むかもしれないけれど、勉強する環境は日本のほうが整っている。だから日本を選んだ。」と話してくれました。でも学費が安いから、大学は海外がいいと言っていました。

両親の離婚後も父との関係は続いています。母と3人で会うこともありますし、私1人で父の住む家に遊びに行き食事することもあります。養育費も入れてくれていたはずですが。

母は漢字の読み書きは苦手ですが、日本語は普通に話せます。ですから家で会話の幼い頃から日本語で、母がときどきタガログ語や英語を使いますが、私は日本語で返答するといった感じです。私はタガログ語や英語の聞き取りは多少できますが、話すことはできません。せっかく言葉がわかる母がいるのにちゃんと教わってこなかった。まさに”宝の持ち腐れ”ですね。

●日本語で困ったことはない

記憶にある限り、私自身が日本語で困ったということはありません。小1の時は算数の授業の時間は日本語の特別クラスがあり、外国籍の子どもたちと日本語を学んでいました。でも小2で転校。転校先の小学校にも日本語の特別クラスはあったのですが、ここに入ることはありませんでした。

転校先の小学校では最初のころ、受け入れてもらえない雰囲気がありました。ハーフだから日本語が話せないだろうという先入観を持たれて遠巻きにされる感じでした。私は傷つくというよりも「そりゃそうだよね。当たり前感覚だよね」と思っていました。

私は結構オープンな性格で誰とでも「友だちになりたい」と思うほうなので、国籍がまわらず自分から積極的に話しかけていくようにしました。そうしたら、クラスメイトも心を開いて接してくれるようになって、数ヶ月でわだかまりは解け、友だちもできるようになりました。学校に編入したての外国人の子には日本語を教えることもありました。友だちは日本人、フィリピン人、中国人、ベトナム人といろんな国籍の人がいます。外国籍の友だちが多

いのは、仲良くなりたいなと思ってきたからだと思います。

私は見た目がハーフに見えるため、質問攻めにあうことが多いのですが、もう慣れたという感じです。「ハーフだよ」と聞かれたら「どこのハーフに見える？」と逆に質問してみたりして。それをきっかけに会話が広がることもあるので、聞かれることについて嫌だと感じることはありません。そういう私の性格は母からの影響を多大に受けていると思っています。母は“フルオープン”な人で、誰とでもすぐ親しくなれるようなところがあります。一方でとても厳しい人でもあるので、もしも私が「学校に馴染めないから行きたくない」と言っても決して許さなかったでしょう。

日本人との違いを感じることはあるとすれば、コミュニケーションの違いです。フィリピン人はおおらかでオープン、「一緒に楽しもう！」という感じですが、そのように日本人に接すると引かれてしまうことがあります。

●経済的理由で大学進学を断念

中学ではバレーボール部と美術部に入り、学校は日本人ばかりでしたが受け入れられないとか嫌な思いはありませんでした。最初だけ「いつ日本に来たの?」「フィリピンってどんな料理があるの?」などと聞かれましたが、聞かれて嬉しかったです。高校はにぎやかで個性的なところで、外国人だから特別視されることは全くなく、軽音楽部で活動しました。ギターを弾いたりボーカルをやったり、文化祭のほか、他校に招かれて演奏するなど楽しい時間を過ごしました。とてもいい思い出です。勉強は国語の現代文が一番まじで、英語はリスニングはできるけれど書く方はスペルが出てこなかったりでした。

高校卒業後は大学受験を考えていました。母には大学に行くように言われていて、高校までアルバイトもしたことはありませんでした。でもやっぱり最終段階になって経済的理由で進学を断念しました。就職組はとっくに就職先が決まっていた時期だったので、そこから就活もできず、進路未定で卒業となりました。日本学生支援機構の奨学金も考えましたが、母が知り合いのお子さんが奨学金で苦労しているのを聞き、あとで借金になるから借りないほうがいい、と言ったのであきらめました。父にも遠慮して学費を頼むことはしませんでした。母は「行ってもいいよ」と言ってくれたけれど、家計の事情を考えると「行きたい」とは言えませんでした。

●週6日のコンビニバイトで家計を支える

その後母の紹介で、母が働いているイタリアンレストランでのバイトが決まりました。もともと接客業に興味があり、店には外国人客も多く英語も使えて勉強になったのでちょうどいいと思ったのですが、仕事はきつく、何よりもお給料も最低賃金以下だったので半年で辞めました。最初の研修期間は1000円と聞いていたのに実際は983円しかもらえず、これならば他のところで働いたほうがいいと思ったのです。

次に見つけたのが今働いているコンビニです。よく行くコンビニだったので、接客を基礎から学びたいと思い、応募しました。時給は1100円。週6日、14時半から23時半ごろまで働いています。次の仕事を探すためのつなぎと考えていたのですが、コロナ禍で希望する接客業の求人はほとんどなく、母が失業したこともあり、もっと賃金のいい仕事をした

いと思いながら見つけれずにいます。

いつか必ず大学、いや専門学校か短大でもいいから進学したいという思いはもっています。もともと家にじっとしていることが得意ではないので、人と接することを通していろいろな学びをし、自身を成長させていきたいですね。

●誰かに悩みを相談することはない、相談される

休みの日はコロナ禍ということもあるけれど、家にひきこもっています。寝ていることが多いですね。悩みを相談できる人はいません。というか相談するという発想がない。自己完結型なので自分で考えて自分で決めるほうです。友だちから相談を持ちかけられることのほうが多いかもしれません。教会には子どもの時から母と通い、フィリピン・コミュニティで親しくし、外国つながりの学生コミュニティでも活動していました。が、学校も教会も進学や家の経済的なことなどを相談したり情報をもらったりするところではありません。

●コロナ禍で母は失業・永住権も取れず

私は日本国籍を持っていますが、母は5年ごとにビザを更新しています。母は本当にいろいろな仕事をして私を育ててくれました。私が知る限りでも飲食関係やビジネスホテルの清掃の仕事などいろいろあります。ここ8年ほどは私がはじめてバイトした例のイタリアンレストランで働いていました。永住権を取るためにも一つの職場で10年ほど続けるほうが良いと考えて頑張っていたのですが、コロナ禍でシフトに入れなくなり、コロナ禍から半年ほどで仕事を辞めざるを得ませんでした。結局、永住権も認められませんでした。

母はその後、食品工場の派遣の仕事を始めましたが、契約が満了すると次の更新は受けられず、1年ほど失業しています。いろいろと仕事を探していますが、私が見ても「その仕事は合わないんじゃない？」というものしかありません。

●通訳ボランティアしても交通費程度、支援が仕事になることと支援の情報が大事

母は日本語が話せるので、病院受診などで特に困ったことはありません。母は国際交流ラウンジで通訳などのボランティアをやってきましたが、交通費程度の謝礼しかありませんでした。日本語も英語もフィリピン語も話せて、フィリピンや在日外国人の事情にも通じて子どもを育てることにしっかりした信念がある母は、学校の先生にも信頼されて、他の外国人生徒の進路のための3者面談の通訳を頼まれたこともあります。しかし、外国人の親は通訳が必要ないと息巻き、進路よりも生徒の生活面の問題を親に相談したかった先生はその権幕で切り出せず、母親は両方を理解しながらも通訳で依頼されていたため、その必要がないと親に言われて口を出せなかったと聞きました。日本にいる外国人の親と子ども、両方の生活と精神面の安定にとって母のような存在は大きいと思います。このようなことがボランティアでなく仕事であればいいのと思います。

来日してから日が浅い人たちはいろいろな困りごとがありますが、こうした支援の場所があることを多くの人には知りません。チラシを配布することでもよいので、支援の情報などが必要な外国籍の人に広く行きわたるような工夫をぜひ行政にしてもらえたらいいなと思っています。

Gさん

●プロフィール

年齢	20代前半（フィリピン生まれ）
国籍・在留資格	日本
来日してからの期間	1歳～現在
横浜市への在住歴	20年
最終学歴	専門学校
婚姻状況	未婚
同居者	母（永住者）、姉
就業状況	アルバイト
住まい	賃貸

●明るく元気な子ども・学生時代

フィリピン人の母と日本人の父のもとに生まれました。両親は横浜の教会で出会ったと聞いています。姉が1人います。1～2年に1度くらい母の出身地に家族で行っていましたが、コロナ禍になってからは行かれておらず、フィリピンに帰ることが生きがいの母は寂しがっています。家の近くの教会にフィリピン・コミュニティがあり、家族ぐるみで親しくして通っていました。

学校でフィリピン人ハーフであることを隠したことはありません。ハーフの友達の中には隠す人がいますが、私はそのことをむしろ誇りに思い、フィリピンの良いところを強く押し出して話をしていました。いろいろなエスニシティの人がいる地域に住んでいることも大きかったのかもしれません。

日本語で不自由したこともなかったし、ハーフということではじめられたり差別を受けたこともありません。日本語は学校で教わるので十分でした。父からは教わりませんでした。私は明るく活発な性格で、学生時代はいつもクラスを中心にいました。

●自信と誇りを与えてくれた父の存在

父の影響も大きかったです。父は幼いころから「あなたはフィリピンのいいところ、日本のいいところ、両方知ることができるんだよ。あなたがきれいなのはハーフだからだよ」といつも言ってくれていました。父は、若いころ1人で海外留学や旅行をたくさんしていて、日本の音楽は聞かないし教会では英語のミサに出ていました。

中学では吹奏楽部に入り、トロンボーン漬けの毎日を送りました。音楽が好きというわけではなかったのですが、仮入部したら抜けられなくなってしまって。東関東大会に出場する強豪校だったので、とにかく練習が厳しくて、週7日部活がありました。大変だったけれど、”やりきった感”は強いですね。楽しい中学時代でした。

高校は姉と同じ県立高校の国際関係の学科に進みました。別の高校だと母親が面談に行くのが大変だろうなと思って。姉とは性格が全く違いますが、仲が良いほうだと思います。姉は典型的な内弁慶で外では物静かな人です。高校では外国つながりの生徒が多く、クラスに10人くらいいました。

中学で燃え尽きたので高校では部活に入らず、放課後は遊びとバイトばかりしていました。バイトはスーパーを3年間、その他お弁当屋、日雇い派遣の袋詰めなどもやりました。バイト代はおこづかいとアメリカに行くための貯金にまわしました。学費はすべて親が払ってくれています。遊びは学校が便利なところがあったのでいろいろな場所に友達と一緒に行きました。

●高卒後アメリカへ、帰国して日本で就活

親戚がアメリカ各地にいて、小学6年の時母と姉といっしょに2か月、高校2年では1か月半アメリカに行きました。そこで英語もタガログ語も覚え、たくさんの親戚の中で楽しく過ごし、その後もSNSでよくやり取りしています。高校の頃から卒業後は英語だけは話せるようになりたくてアメリカには行きたい、という思いで頭の中は”お花畑”でした。高校卒業後の進路のことはあんまり考えていなくて。ただ漠然とアメリカに行きたいという思いがありました。アメリカには、母方の叔母が住んでいて年の近い従姉妹もいるので、そこでまた暮らしたいという思いもあり、渡米して自分で学校を探しました。

半年間語学学校に行き、その後短大に進学して保育を学び、保育園や幼稚園で教えられる資格を取りました。モンテッソーリ教育の幼稚園をひらく資格も取れました。しかし学費が尽きて1年で日本に戻りました。就職活動をしようとしたのですが、日本では中退とみなされ高卒になると言われ、5か月間アルバイトし、その後日本の専門学校に行きました。ビジネスやホテルのコミュニケーションを2年学び、卒業しました。就活し留学カウンセラーの内定をもらった矢先、コロナの拡大によって内定は取り消しになりました。もう1つ決まっていた航空会社もだめになり、大きなショックを受けました。

●コロナで内定取り消しからメンタル不調に

自分の良さを存分に生かした仕事ができると思っていたのに、それが目の前で閉ざされてしまったことは本当にショックでした。体調が悪くなり、電車に乗れなくなりました。心配した母と大きな病院に行って血液検査などを受けましたが理由がわからず、もしかしたら精神的なものなのではないかということで精神科の受診をすすめられ、母の紹介で外国人をみてるクリニックにつながり、今も診察を受けています。

母は元気で活発な私が精神科にかかるなんて、と事実を受け入れられないところが今も少しありますが、精神科にかかったことで私はとても楽になりました。今は就職先を探しながら、ドラッグストアでアルバイトをしています。新卒の初任給くらいは稼いでいるんじゃないかな。家計では生活雑貨全般を担当し、買って補充するまでをやっています。

●父の病死、母は外国につながる女性の支援団体で活動

私に自信と誇りを与えてくれた父ですが、私が中学1年になる時、病気で亡くなっています。お父さんが亡くなった話はあまりしません。母子家庭になって「かわいそう」「大変だね」と言われるからです。「お母さんを助けてあげて、支えてあげてね」とも言われます。だから姉とは仲がいいんです。父のことを考えるとつらいけれど、でも母は強すぎるくらいたくさんの愛を私たち姉妹に注いでくれています。だから決して不幸ではないんです。また、

母子家庭と言われ両親が離婚した家庭とひとつでくられるのも嫌です。父親が亡くなったことは隠していましたが、高校に入ったら母子家庭の子はたくさんいました。施設から通っている子もいました。

母に対しては本当に感謝しかありません。以前母は外国につながる女性の支援団体で働いていましたが、父が亡くなった後はインターナショナルスクールの幼稚園の先生として仕事をし、その支援団体はボランティアで手伝っています。子どもの頃、母が支援団体の仕事で生活保護を受ける人の家探しをするのについていったこともあります。そんな時、川崎の街は優しかった記憶があります。経済的に楽ではなかったはずですが、アメリカ行きを含め、私がやりたいことにNOと言ったことはありません。本当に感謝しているし、母のことをとても尊敬しています。コロナでずっとフィリピンに帰国できない状態が続いているので、早く往来が自由にできるようになるといいと思っています。

●外国つながりの子が安心して暮らせる日本に

国際的な環境で育ってきたので、日本はまだまだ島国だと感じることがあります。私はいじめや差別を経験したことはないけれど、動画サイトでハーフや外国籍の子どもたちがいじめに遭っている事実を知り、大きなショックを受けました。フィリピンのハーフというとフィリピンパブを想起して馬鹿にされるので、フィリピンのハーフということ隠すという友人もいます。ハーフや外国つながりの子が自分らしく安心して暮らせるようになって欲しいです。またアメリカと比べると、性暴力などについて加害者への処罰が甘いし、深刻な人権侵害であるという意識が薄いなど。

賃貸で家を借りる時のことは何とかして欲しいです。特に母の名前で家を借りようとすると、かなりの確率で落とされてしまいます。物件を内見した後の審査の段階で「外国人だからダメ」と言われたり、最初の段階でお断りされることも少なくありません。これには強い違和感と怒りを感じます。

小学校の時は、母が日本語がよく分からないことを知ってPTAの役員を押し付け、役員になった母に日本語が下手だと笑う人がいたことを最近になって母から教えてもらいました。許せない思いに駆られました。また、日本語が話せないのだからママ友の輪に入ってくるなという雰囲気もあったそうです。裕福な地域柄、専業主婦が多く、ハーフというと白人とのハーフだったし、フィリピンや中国つながりの人には優しくない雰囲気があります。そういう意味では高校が一番過ごしやすかったです。

今後は体調も良くなってきてアルバイトもしっかりできるようになったので、早く母を楽にさせてあげたいです。就職に備えてTOEICの勉強もしています。もっと英語が堪能になって、フィリピンと日本の懸け橋になるような仕事がしたいです。

Hさん

●プロフィール

年齢	20代後半（日本生まれ）
国籍・在留資格	日本
来日してからの期間	生まれてからずっと
横浜市への在住歴	10年以上
最終学歴	高校中退
婚姻状況	未婚、子あり
同居者	父母、子ども（小学生）
就業状況	アルバイト
住まい	賃貸

●小2まではハーフはいじめられ、それ以降はブームに

タイ人の母、日本人の父のもとに生まれました。一人っ子です。母が地方の観光地に出稼ぎに日本に来て、その後横浜の Snackbar で働いていた時に父と出会ったそうです。母が40代の時に私は生まれました。父は母より6~7歳年上で、現在は60代後半です。幼い頃は両親とも仕事で忙しかったので、私はタイの親戚に半年間預けられていました。言葉もわからず、体罰があったり、「父親が日本人」ということでいじめられたりして、とてもつらかった。

小学校からは横浜ですが、今度は「母親が外国人」と嫌がらせを受けました。タイにいても日本にいてもいじめられるんだなと思いました。小学校には他にもハーフの子がいて、肌の色が黒い、キムチ臭いなどと、やっぱりいじめられていました。

でも小3くらいから状況が変わりました。ハーフの子が増え、ハーフの芸能人が活躍する“ハーフブーム”みたいな状況になり、ハーフが「うらやましい」と言われるようになりました。私は活発な子どもで、男女問わず友だちもいて、木登りが好きでした。小学校時代が一番楽しかったんじゃないかな。

ハーフで目立つためか、中学では人の妬みを買うことがありました。中1の時メールのなりすましが流行り、私を装って他の子の悪口を言ったメールがクラスメイトに送られるという事件が起きました。無実だったのに、担任の先生も私を信じてくれなくて、味方が一人もない状況が楽しく、半年ほど学校に行かれなくなってしまいました。

●14歳で妊娠

学校に行くきっかけになったのは妊娠です。ひまだったこともあり、妊娠3ヶ月目で登校するとクラスメイトが「あの時はごめんね」と言ってくれました。お腹が大きくなってきたら、大好きな制服を着られなくなっちゃうんじゃないかなと思ったのもあって行きました。子どもの父親は4歳上の日本人の高校生で、幼なじみの紹介で知り合い、中学に入っすぐつきあっていました。母から性教育を受けていたので、病院に行って妊娠はすぐ分かりました。当時、『14歳の母』というドラマが流行っていて、妊娠がわかるとマスコミまでやって来て大騒ぎになるという話だったので、私のところにも記者が押し寄せるのかなと思ったけど、違いました。私は産みたいと思っていました。

●両親が話し合い、子どもの父は逃げて音信不通に

でも彼はお腹を蹴り、「子どもを墮ろせ」と暴力を振るってきました。「俺の親にもお前の親にも絶対に言うな」と言われ、タバコの火を押し付けられたこともあります。墮ろすように言われましたが「誰にも言うな」というので、できませんでした。私は我慢の限界になってしまって、両親に妊娠のこと、彼からDVを受けていることを話しました。母はものすごく気性が激しい人で、父の眼鏡を壊すなどは日常茶飯事だったため、案の定、怒り狂っていましたが、父は「お前の人生なんだからお前が決めたらしい」と言ってくれました。ファミレスで私がいる前で両親同士が話し合いましたが、彼は逃げてしまい、いませんでした。メールで彼にもう墮ろせない時期であることを伝えると「お前と腹の子、どっちも死ぬ」と返事が来て、それ以来音信不通です。産まれたら認知すると彼の両親に言われたのですが、約束は守られませんでした。その時は辛かったです、時が解決してくれました。

●まわりは親切、でも出産後 先生は教室に入れてくれなかった

妊娠が知られるようになるとクラスメイトや先輩などはとても親切にしてくれました。彼のDVの話がけっこう広まっていたんです。妊娠6ヶ月までは制服が着れてお腹も隠せたので通学しました。8ヶ月になっても体重が増えなかった私を気づかって友だちがLサイズのピザを3枚買ってきてくれたり、4歳上の先輩からいきなり心配の電話をもらったり、幼なじみのお姉さんが出産について体験談を教えてくれたり。心強かったです。

でも学校の先生たちは冷やかかでした。出産後3か月くらいで、中学3年の時学校に復帰しようと登校したら、教室に入れてもらえず、体育祭や修学旅行にも行かせてもらえませんでした。卒業アルバムにも写っていなかった。不登校に仕向けられたようでした。勉強は教えてくれないのに先生たちは「高校受験しろ」と言い、通信制の高校に入学。でも子育てに忙しく、学校が遠方だったこともあり結局卒業できずに中退することになりました。

●夜の仕事から介護に転職したが体調不良に

娘は1~2歳から家の近くの保育所に預け、夜は母親に面倒を見てもらいながら、父の知り合いがオープンした居酒屋でバイトし始めました。夜は22時には帰るようにしましたが、客に触られるなどセクハラがあったので、途中でホールからキッチンに移って2年くらい続けました。居酒屋を辞め、18歳からキャバクラで働き始めました。時給6000円、月に100万円稼ぐこともあり、半年間店長に引き留められたのですが、節日の誕生日に辞めました。

以前から医療や介護の仕事に興味があったのですが、自分には無理だとあきらめていました。でもいっしょに夜働いていた友だちが介護の仕事を始め、介護ならば資格がなくても始められると聞き、私もやりたくなって老人ホームでの仕事を始めました。派遣なので2か月ごとに職場は変わりました。収入はキャバクラ時代の5分の1に減りましたが未練はなく、お年寄りの話を聞くことが大好きだったので、仕事は充実してとても楽しかったです。天職でした。

でも3か月くらい経ったころから体調不良が続くようになりました。以前にもあった吐き気や41度近い高熱がひんぱんになり、精密検査を受けても原因がわからず、精神科に行ったらストレス性の病気と診断されたんです。持病のぜんそくの悪化もあり、介護の仕事は

辞めることになりました。

しばらく療養のために休み、今は少し前に知り合いが立ち上げたバーで週3日、18時から夜中の1時までバーテンダーをしています。バーの名前は私が付けたんですよ。でも生活は昼夜逆転していません。朝は7時には起きます。心のケアが必要だと感じて、話をよく聞いてくれる精神科にも通っています。

●父が倒れ、家計が逼迫

子どもは現在小学校高学年になりました。活発で愛情深い子だと思っています。水泳を習っていて、空手もやらせようかなと思っています。家のあたりは治安がとても悪いんです。両親と子と4人で住んでいますが昨年、父が脳梗塞で倒れました。それまでは警備員や建築関係で働いていたのですが、左足に軽い麻痺が残ったので、働けなくなってしまいました。

私が子どものころ、両親は24時間年中無休の食品店を10年以上やっていましたが、2011年の東日本大震災の後に閉じたと聞いています。母が昼間、夜は父が交替で働くほか、母のきょうだいも2人手伝い、従業員も雇っていましたが金銭トラブルもありました。その後タイ料理の弁当屋を1年やりましたがそれも辞めました。母はホテルの清掃の仕事をやって1年くらいになりますが、最近は人手不足で夜勤にシフトを入れられるようになって、忙しそうです。両親はいつも仕事で、子ども時代に食事を作ってもらった記憶はほとんどありません。タイでは屋台で食べ物を買うことが一般的なので、子どもの頃タイにいた時も、おじいちゃんが朝6時ごろ朝食を買って来ていました。今は父が働けないので、経済的には厳しいと感じています。

子どもは私のことをきれいだと自慢します。昨年、「パパに会ってみたい」と言われました。母は「あんなやつに会わせちゃダメ。悪いことしたから」と否定的なんです。私はそれは子が決めることだから「自分の好きにすればいいよ」と言いました。「ママは今幸せだから、パパが幸せならいい。パパとママには愛があってあなたが生まれたんだよ」と話しているんですよ。

●家族や親戚に頼られ、負担と張り合いと

今は私が家計管理をしています。お金の使い方を考えたり、毎月の収支を合わせたり。母の小遣い額も決めて、いくら食費に回すかも考えます。母は日本語が得意じゃないので、父の入院手続きなどすべて私がやらなければなりません。両親を支えていかなければ。それが負担になっていると精神科の先生からは言われています。いとこの姉も最近、緊急連絡先を私にしていいかと聞いてきました。頼られることが多いと感じています。頼られるのは嬉しい反面、重いなーと感じることもあります。でも生きている実感があって、張り合いがあります。

心身の状態を安定させて、いずれはぜひ介護職に戻りたいと思っています。高齢者と接している時間が好きなんです。彼氏はいますが、結婚願望はあまりありません。以前、キャバクラで働いていた時、お客さんだった住職さんから「娘が成人した時あなたはまだ34歳だから。そこから第2の人生を歩むこともできるんだよ」と言われたんです。同世代の友だちとは環境が違い過ぎて、話が合わないこともあるけれど、あせらなくてもいいと思えるよう

になりました。今は家族のことに集中しています。

●どうやって人に頼ったらいいかわからない

相談できる相手はいません。家族のことを人に話したくないという思いが昔から強いですね。どうやって人に甘えたり、頼ったらいいのかわからないという感じでずっと来てしまった。ハーフにはそういう人、そして情緒不安定な人が多いと思います。でも何も聞かずにおかずを差し入れてくれたり、そっと助けてくれる人、支えてくれる人がいてくれて、それはとてもありがたいことだなと思っています。特にアートラボの方は、夕食の材料がないと思った時、ちょうどおかずを差し入れてくれたりして神様のような存在です。母が娘にタイ語で話しかけるので、娘は日本語が不得手ですが、アートラボの方をお願いして日本語と勉強をみていただいています。今は大変だけど、大変じゃない、っていうか…、生きてるなあ、って感じです。

●病院や役所で親の通訳をするのが大変

それにしても、病院や役所で私が親の通訳をしなくてはならないのは大変です。母は日本語はまあまあ話せますが、私と話す時はタイ語です。父はタイ語は話せません。私もタイ語は忘れてきているし、通訳といっても分からないことばもあるんです。母が病院に行く時は、私が母の症状を紙に書いて母に渡します。役所から母の通訳として来るように言われることもあるのですが、遠方だったり、私にも都合があるし、とても不便です。外国人の人も増えているので、役所や病院で簡単でも通訳ができる人が増えてほしいと思います。役所とかラウンジと呼ばれるところがやっている通訳のボランティア等は利用したことがありません。

【支援者談】

Hさんとは彼女の親が経営するタイ食料品店の客として会いました。Hさんは小学校高学年で、近所のアイドルでした。中学で妊娠した頃、Hさんに「彼氏いる？」と聞かれ、特段な答えをしなかったのですが、その後店がなくなり、Hさんと会えなくなりました。風のうわさで出産したと聞き、あの時なせもっと話を聞かなかったのだろうと悔やみました。今、外国つながりの子たちの居場所づくりをしているのは、場所があればHさんにつながっていられたのにという気持ちからです。その場所に今、Hさんの子どもが来てくれています。

Iさん

●プロフィール

年齢	20代後半（ペルー生まれ）
国籍・在留資格	ペルー・永住者
来日してからの期間	10歳～現在
横浜市への在住歴	10～12歳
最終学歴	保育の専門学校
婚姻状況	既婚
同居者	夫（アメリカ国籍・配偶者ビザ）、子ども2人
就業状況	パート
住まい	賃貸

●10歳で来日、授業はまったくわからなかった

日系4世で父方の祖父が沖縄出身の日本人です。10歳の時、日本で働いていた両親のもとに来る形で兄とともに来日。横浜市に住み始めました。

当時は小学生でしたが、授業に参加しても何もわからない状態で、それでも座っていなければならなかったのも、とても苦痛だったことを覚えています。そうした状況が3ヶ月ほど続いた後、国語の時間だけクラスメイトと分かれて授業を受けるサポートがはじまり、マンツーマンで国際教室で日本語を教えてもらいました。算数はペルーの方が進んでいたのですが、他の授業にはついていかれず、あとは体育と図工くらいしかできなかつたんじゃないかな。コミュニケーションが難しく、友だちはずっとできなかつたです。家に持って帰るプリントは翻訳してもらっていたと思います。今でも日本語には苦手意識があります。

中学に入ると国際教室はなくなりました。「自分で頑張るってね」という感じ。親の仕事の都合で中学1年の終わり頃に市外へ転居しました。その地域は南米系の外国人も多い場所です。一部の授業や放課後には国際教室で授業を受けることができ、国際教室の先生にはとてもお世話になりました。スペイン語がわかるブラジル人の友だちなどもいたので、横浜で暮らした小学校時代に比べるとだいぶ暮らしやすくなったと感じています。

●保育士を目指して専門学校へ

成績の問題があり、中学卒業後は定時制高校へ進みました。高校になってやっと授業が理解できた感じがしました。4年制でしたが、勉強を頑張って3年で卒業しました。昼間はいろいろなアルバイトをして働きました。ホテルの清掃や宅配便の仕分けなどをし、宅配便の伝票の住所を読むことで日本語の勉強になりました。コンビニなどでも働きました。父母には余裕が無かったので、アルバイト代からペルーの兄へ送金もしました。

子どもが好きなこと、幼い妹や弟を通して保育園と関わる場面で、言葉ができずに困っている外国人のお母さんたちのことを知り、そうした人たちの手助けをすることができたらという思いもあって、高校卒業後は保育士を目指すことにしました。

20歳で2年制の保育の専門学校に入学。でも勉強についていくことは大変で、ユツカの

会の日本語ボランティアの先生にたくさん手伝ってもらいました。この先生は中学の国際教室の先生でもありました。専門学校生の時、日本語を教えてくれる人を探して役所の教育委員会で尋ねたら、この団体を紹介してくださったのです。テストの点が落第だった時も課題提出などをして、合格させてもらうなどして卒業し、念願の保育士資格を得ることができました。専門学校卒業後、妹を連れて南米やヨーロッパを旅行しました。旅する中で、スペイン語が話せることはとても便利なんだとあらためて感じました。その後、正規雇用で保育園に就職しました。

ペルーにも行き、10年ぶりで大好きな兄に会いました。兄は中学1年の時に日本に来ましたが、日本語は全くできず部活のサッカーだけをやっていました。サッカー推薦で高校に行く話もあったのですが、ペルーに戻ることを希望して帰ってしまいました。

●結婚、就職

就職した少し後に結婚。相手は1歳年上のアメリカ人です。米海軍で日本に来ている時、ペルーレストランで知り合いました。このレストランの店長が母の知り合いで、私も夜にこのお店でアルバイトをしていたんです。

夫は今は海軍を除隊しているので、日本の永住権を持っている私の配偶者として1年ごとにビザの更新をしています。子ども2人はアメリカ国籍ですが、日本のビザを更新しなければならず、書類の手続きなどが大変です。アメリカでは出生したら自動的に国籍がもらえるんですけどね。日本では出産した時、新生児をビザのために入管へ連れて行かなければなりません。この先も日本で暮らしていきたいと思っていますが、もし子どもがアメリカの大学に行きたければアメリカに行くかもしれません。ビザで困ることがもうひとつあり、更新のお知らせが来ないことです。自分でいつも気を付けていなければなりません。

保育園は産休を取って一度は復帰したのですが、子どもの体が弱かったこともあり、結局退職。その後、病院の看護助手のパートをしています。実際は介護の仕事です。育児をしているのでしばらく保育の仕事から離れたいという思いから選びました。今は週3、4日、7時間くらい働き、時給は1000円以上もらえています。お年寄りの入浴のケアや移動など、入院患者の世話です。敬語がうまく使えなかったり、外国人だったりすることで、お年寄りから嫌がられるのではないかと考えていましたが、そんなこともなく、やさしい患者さんが多くて助かっています。

子どもは4歳、2歳の2人です。長男が3歳児健診の時、言葉が遅れているので、自閉症ではないかと指摘を受けました。夫はあまり日本語が話せず、英語がネイティブでスペイン語も話し、私はスペイン語がネイティブで日本語も話すため、家での会話はスペイン語です。子どもたちはスペイン語と日本語と英語で育っているせいで言葉が遅れてしまっているのではないかと考えているのですが、様子を見るために、療育センターに通っています。

子どもは保育園に預けています。私の両親は近所に住んでいるので子どもを預かってもらうこともありますが、ふたりとも平日は仕事をしているので、多くを頼ることはできません。

●父が未だに非正規雇用なのは外国人差別

私には年の離れた妹と弟がいます。母は私以上に日本語が不得意なので、妹や弟のお迎えや連絡等は私がやるが多かったです。

一緒に来日した兄は日本語が全然できませんでした。部活のために学校に行っており、ずっとペルーに帰りたいたっていました。サッカーが得意だったので、サッカー推薦で高校に入学できるかもしれないという話もあったのですが、結局、本人の強い希望で、中学卒業後ペルーへ帰国しました。私も一緒に帰りたかったのですが、ペルーは治安が良くないので女の子は手元に置いておきたいという母の希望で帰国させてもらえませんでした。兄はそれ以来、祖父母と暮らしています。ペルーで大学を出て仕事をしています。SNSが使えるようになる前は話をすることも難しく、家族バラバラでつらかったです。最近、兄と祖父が新型コロナウイルスに感染してしまい1か月療養するという大変な事態がありました。今は元気になりましたが、向こうでは雇用が日雇いなので休んでいる間収入が無くなり、少し大変だったようです。私も会いに行きたかったのですが、航空券が通常の2~3倍の価格となり、断念しました。

父も母も10代で来日し、現在50代と40代です。父は車の部品工場でパーツの組み立てなどの仕事をしています。母はホテルの清掃の仕事など転々としていますが、いつも何らかの仕事をして、働いています。父はあれだけ長く工場で働いているのに、未だに正社員になれないのは外国人差別だと感じることもあります。夫も工場などのパート社員をしていて非正規です。外国人はいくら仕事ができても、見た目や名前で見れば外国人と分かれば正社員にはなれないのだと思います。外国人の雇用が安定することを望みます。

●役所や病院にいろいろな言語を話せる人を配置してほしい

両親は永住権を持っていますが、ふたりとも日本語が得意ではなく、漢字がわかりません。妹や弟たちが小児科に行っても病状を説明できないので、私がいつも一緒にいって通訳をさせられていました。私が子どもだった時は市役所の通訳の予約をして手続きなどを頑張ったそうですが、病院でとても苦労したと聞いています。

私は困ったことがあれば、体調であれば病院、子育てのことであれば母、長男のことは療育センターのソーシャルワーカーに相談します。知り合いの外国人でも自閉症の疑いのある子について悩んでいる母親がいて、療育センターについて教えてあげたり、代りに電話してあげるとも言っています。何か手伝えることがあったらやりたいと思います。私もユツカの会の先生などに助けられてきたので。

役所では通訳のボランティアを頼むことができますのですが、いつも頼めるわけではなく、母から困ったという話を聞くことがよくあります。あとは教育委員会で働いている先生に大変お世話になっています。英語もスペイン語も話せる人なので、母は何かあるとその先生にお願いしています。この人が退職してしまったらどうなるんだろうと心配するくらいです。役所や病院の窓口で、いろいろな言語が話せる人をおいて欲しいと思います。

Jさん

●プロフィール

年齢	20代前半（韓国生まれ）
国籍・在留資格	韓国・永住者
来日してからの期間	4歳～現在
横浜市への在住歴	なし（市内の教会に所属）
最終学歴	大学在学中
婚姻状況	未婚
同居者	両親
住まい	親の持ち家

●韓国語より日本語のほうが得意

4歳で来日しました。私が生まれたころ、韓国は経済危機の真っ只中で父が勤めていた会社も経営破綻したそうです。その後、父は日本のメーカーにエンジニアとして入り、転勤のため、家族全員で来日しました。来てすぐは全員、日本語ができませんでした。幼稚園に編入しましたが、友達に「何して遊ぶ？」と聞かれ、ジェスチャーで示した覚えがあります。でも幼かったこともあり、日本語はすぐに覚えました。学習教室にも通い、小学校入学時には話すことができました。その後も日本語で苦労したことはありません。

家では韓国語を使っていましたが、私は韓国語を聞いても話すことは不得手で、親が韓国語で話す言葉に日本語で返していました。親は病院に行っても医師が言うことが分からず苦労したと聞いています。それでどうにかしようとする他の単語より優先して体に関係することを勉強したとのこと。大変だったそうです。今は仕事で全く困らないくらい両親とも日本語ができます。姉が中学でフィリピンの語学学校に留学し、翌年小学5年の私も同じところに1年間留学しました。日本の小学校には友だちもいて馴染んでいたのが最初は行きたくなかったが、ライバル心もあり、行くことに決めました。東日本大震災の後だったので祖母が放射線を心配して、どこか他の国に行っていた方がいいと勧めたためというのがあります。

そこは韓国人の夫婦が経営する語学学校で、寮のようなところでした。フィリピン人の先生を学校に呼んで英語を教えるという形で、生徒は全員韓国人でした。寮でも英語で話すように言われ、韓国語を話すと罰金だったのですが、目立たないように友達と韓国語を話すうちに韓国語と英語が話せるようになりました。韓国人の生徒は小学3年生から大学生までいろんな年齢の人が来ていました。週に1度しか親に電話できなくて、最初はホームシックになりましたが、年の近い子どもたちが1日中くっついて過ごすのがとても楽しく、すぐに慣れて孤独を感じなくなりました。

●教育熱心な親、でも韓国では普通

6年生の夏休み明けにフィリピンから帰国したのですが、クラスの女子はグループのようなものができていて、そこにうまく入れず、つらかったです。

わが家に限らず、韓国では子供の教育に熱心でお金をかける人が多いです。私は小学校の

時、ピアノ、バイオリン、数学、英語、公文、水泳、習字、空手を習っていました。学校が終わると毎日まっすぐ家に帰るので、友だちと遊べません。習い事でその時は友達と遊べなくて大変だとも思いましたが、塾に行っていたお陰で大学にも入れたので、よかったですと思います。ピアノとバイオリンは今でも習っています。

フィリピン留学から帰ってすぐ、英語だけで中学受験をしたのですが、遠くて通学が大変だと思って中学は地元の公立校に進みました。友だちはみんな、小学校からの知り合いだったので過ごしやすかったです。音楽の部活に入り、副部長をやりました。中3の時は生徒会長になりました。いつもクラスを中心にいて、充実した中学時代でした。でも部活の他に習い事も続け、塾にも行っていたのですごく忙しかったです。

親は部活をやることに反対はしないけれど成績に厳しく、80点以下は絶対に許さない。成績が下がったら部活を辞めなければならないと言われていました。そんな親への反抗は、学校の小テストは見せないとか、塾は小テストが終わった頃を見計らって少し遅れて行く、という小さなものでした。

高校は私立女子高に入学しました。いくつか受けた高校は母が勧めたところで、そうでなければ知りませんでした。高校時代は勉強ひとすじで、部活はやりませんでした。友達とは仲良く勉強していました。高校3年生の時は勉強時間を確保するため、朝は特急で通学していました。高校で受験対策は十分だったので、学校と家の途中にある塾は自習スペース確保のために使っていました。

自分の親が自分にしている教育を韓国で話すと「うちもそのぐらい」と言われますが、日本では「すごい、そんなにやってるの」と驚かれます。韓国に年下のいとこがありますが、毎日塾で帰りが夜中の1時です。私の両親は、韓国の子どもがあまりに勉強して子どもらしい生活を送っていないので、余裕を持たせるために私たちに日本で教育を受けさせることにしたそうです。韓国の大学の進学率は100%に近くみんな大学に行きますが、ソウルにある大学でないと就職が難しいと言われてるので、みんなすごく勉強します。日本では専門学校に行って大学に行かない人もいるのを知って驚きました。以前韓国は日本のマネをして頑張り続けてきたと思います。韓国の友人は留学して世界で勉強していますが、日本の友人は日本でいいでしょ、という感じ。韓国人は世界で活躍したいと思っているようです。

●「仕事はずっとやってね」と母に言われて

大学は国立志望だったのですが落ちて、附属高校受験で不合格だった学校の大学に入り、リベンジを果たしました。その学部を選んだのは、その大学の中で最も偏差値が高かったからです。サークルにも入りましたが、コロナ禍で活動ができなくなり、休部状態です。昨年1年間はオンライン授業で友だちにも会えず、今年度からゼミのみ対面授業になりました。

そろそろ就職についても考えています。韓国やその他の外国に行きたい気持ちもあり、外資系企業を考えているのですが、日本の友達の方が多く、離れる勇気もないので、やはり日本で就職かもしれないとも思っています。日本で韓国人の友達は、大学に入って初めてできました。親は「海外には行かないの?」と言います。コロナがなかったら留学しようと思っていました。英語は忘れないように、塾や英会話に通っているの、人並みよりも話せます。両親はテレビCMで出てくる企業を指して「ここに入って」などと言います。親に反抗しな

いのかと聞かれると、反抗するひまもなく正しいと思ってきて今は結果オーライと。

「女だから〇〇しなさい」と言われたことは1度もありません。「早く結婚したいなあ。」と言ったりすると「仕事はずっとやってね。今まで教育にかけてきたお金が無駄になっちゃう」と母に言われます。母も韓国語の講師をしています。高校までは勉強優先で家の手伝いは一切やらず、大学になってはじめて掃除やお皿洗いなどをやっています。

●街頭のヘイトスピーチに恐怖を感じる

日本で差別やいじめを経験したことはありません。しかし学校の歴史の時間に、自分が知る歴史とは違うことを言われるのがつらいです。たとえば豊臣秀吉は韓国では侵略者と扱われているけれど、日本では英雄。自分のアイデンティティは韓国と言っても日本に悪感情があるわけではなく、どっちも理解できるけど、どっちにも合わせるの難しいです。

スポーツなどで「日本と韓国どっちを応援するの？」と友だちに聞かれて「私は韓国を応援するよ」と言うと「えー？そうなんだ」という反応を返されます。家族全員が韓国を応援するので、私にとって韓国を応援することは当たり前なのに、日本を応援することを強要されているように感じます。その場で違う、と言えないような。また「日本が勝って嬉しい」と言われても、私は韓国が負けて悲しいのであまり共感できません。それが言いにくいので、共感を強制されているように感じます。その雰囲気からしてつらいです。

オリンピックとかスポーツの日韓戦があると、必ず SNS で韓国の選手にケチがつくので「どうしよう」という気持ちになります。自分が日本人からケチをつけられているようで、気分が悪いです。でも自分は日本に住んでいるのだから、それに対して何も言うことができない。私に対して直接ケチをつけるようなことを周りから言われることはありませんが。たまにデリカシーのない人が無意識に書くことはあります。

同年代と話をしている日本語ができると「ハーフ？」と聞かれます。韓国人だと伝えると「ずっと日本にいないでしょ？」「なぜ日本国籍にしないの？」と言われて閉口します。「韓国人だからじゃない？」と返しますが、もし日本国籍にしてよ、と言われてもしないということは、日本人の前では言いにくいです。韓国人として誇りを持っていることなどはとても言いづらいです。

日本に住んでいて外国籍であることの不利益は、正直、数えたらきりがありません。ヘイトスピーチもそのひとつです。私の家の最寄り駅にもプラカードをもってヘイトスピーチをする人たちがやって来ることがあります。ヘイトスピーチに反対する人たちともめたりするのですが、自分が議論の中心にいることになるので怖いです。そこを通る時は、無言になって韓国人だとみられないようにその場を離れます。暮らしぶらい、生きづらいつ感じます。警察官もただ誘導をしているだけで取り締まりはなく、これでいいの？と感じました。

新宿や渋谷の街には日章旗を掲げて大きな音を出している街宣車がいて、日本人の友だちと歩いても怖いと感じます。1度だけ日本人の友だちに怖いと思っていることを伝えましたが「そう？怖い？うるさいだけじゃない？」と言われ、言っても無駄だし余計傷つきました。この怖さについては親と韓国人の友達にしか話せません。SNS の誹謗中傷もそうですが、言論の自由と言うけれど、傷つく人、怖い思いをする人がたくさんいるのだから、もう少し厳しく取り締まってほしい。日本にいる韓国人のことも考えてほしいです。

でも、ハイトスピーチに反対する人たちとも距離があると感じています。そういう運動に参加するには犠牲にするものが大きすぎると感じます。

●小学校から国際理解教育を取り入れてほしい

日本と韓国の学生が交流する団体に入ったことがあります。日本人の学生は、慰安婦のことなどはほとんど知らないのでこちらが言及するのが申し訳ないと感じました。韓国では慰安婦のことはみんなが知っていますが。

慰安婦問題だけでなく、戦争を起こした事等についても「昔はしょうがなかったんだ」とか、仕方がないということばで片付ける人が日本にはとても多いと感じます。日本人の友だちは日韓戦やハイトスピーチに関する私の感情を知らないことが多いので、個人の問題というよりも、たとえば小学校で日本に住む外国人についての理解教育のようなものを取り入れてもらえたらいいと感じます。

以前、隣の家のおばあさまが、ある時「ごめんね」と言ってきたことがありました。慰安婦のことでした。こんな人もいるんだね、と家族で話しました。政治とか大きなことでなく、個人レベルでこんな話をふつうにできたらいいと思います。

Kさん

●プロフィール

年齢	20代後半（日本生まれ）
国籍・在留資格	日本（ベトナムからの帰化）
来日してからの期間	生まれてからずっと
横浜市への在住歴	20年以上
最終学歴	4年制大学
婚姻状況	既婚
同居者	夫（日本人）
就業状況	正社員
住まい	持ち家

●日本生まれ、日本育ち

生まれも育ちも日本です。父が仕事の関係で最初に来日し、その後母を呼び寄せて結婚して、私と妹が生まれました。父は長年、日本で正社員として働き、母は時々検品のアルバイトなどを行っています。母が日本の病院で私を出産した時は日本語があまりわからず、苦労したと聞いていますが、父の上司の奥さん（日本人）などにお世話になったそうです。地区センターでやっている料理教室に通ったり、地区センターのボランティアの人に助けられたと聞いています。

両親ともにキリスト教徒で、私たち姉妹も幼児洗礼を受けています。数年前から技能実習生や留学生が増えたことを受け、ベトナム語のミサが行われるなど、教会にもベトナム人のコミュニティができていますが、両親が来日した時はなかったので、私たちはずっと日本語のミサを受けてきました。

●勉強は得意だった

幼稚園、小学校と当たり前前に日本の学校に入りましたが、小学校1年生の時だけ日本語の補習クラスを受けていました。週1日、マンツーマンで教えてくれます。2年生になった時、もう必要ないということで抜けたのですが、必要があればずっと教えてもらえたようです。習い事はピアノや塾に通い、中学・高校では部活動もしていました。

勉強は比較的得意なほうだったと思います。県立の進学校に進んだ後は、私立4年制大学で政治学を専攻しました。サークルに入り、いろいろな種類のアルバイトも経験し、海外旅行にも年数回出かけしていました。とても充実した大学生活だったと思います。学費は親が払ってくれたので、バイト代はお小遣いとして使っていました。

●家族で日本国籍を取得

物心ついた時から、自分は日本人ではなくベトナム人なんだという自覚は強く持っていました。外見が日本人に見えるのに、ベトナムの名前なので、「日本人ではないの？いつから日本に住んでいるの？」など、初対面の人からは質問攻めに遭うことが多かったです。そのたびに両親のことや日本で生まれたことなどを話します。もう100回以上同じ話をした

んじゃないかな。いつものことなのでもう慣れました。でも外国人だということで、いじめられたりしたことはありません。友だちも普通に接してくれたし、否定的なことを言われた記憶もないです。

ベトナム人と知って、「日本語上手だね」と言われたこともあります。相手も悪気があって言っているわけではないので、「ありがとうございます」と普通に返していましたね。

両親は日本語があまり得意ではないので、書類や手続き面でスムーズにいかないことが多くありました。母は来日時日本語ができず、私の幼稚園や学校に必要な物品もどこで買えばよいのか分からず、地域や周りの方に助けられたそうです。

大学時代に家族で帰化（日本国籍を取得）しました。その時から日本の姓を名乗っています。家族皆で話し合って画数の少ない名前に決めました。大学の友人たちは驚きましたが、元の名前で呼んでくれていました。日本国籍取得後はベトナムに長期滞在する際、ビザを取る必要が出てきますが、ベトナム人は海外に移住する人も多いので、両親含め、抵抗はありませんでした。却って日本のパスポートを持っているとビザなしで滞在できる国も多くなり旅行に便利ですね。法務局へ書類を提出して半年ほどの手続きで認められました。ただ身分証明書や銀行の通帳の名義変更など細かい事務作業が結構面倒でした。結婚して姓が変わる時必要な手続きと同じですね。親はいずれベトナムに帰るつもりかどうか、聞いたことはありません。でも日本が寒い時期はベトナムに帰って、日本とベトナムに半々で暮らせるといいなどは思っています。母はきょうだいや祖父母とオンラインツールでよく話しています。

●就職、そして結婚

大学卒業後は、事務系総合職として大手建設会社に就職し、企画戦略策定の仕事をしています。同期の事務系総合職の女性は10人程度、男性は20人弱でした。一般職は数百人いると思います。就職活動の時はベトナム語と日本語の二ヶ国語が話せるので、海外とつながる仕事ができたらいいという思いもあり、メーカーを中心にまわりました。同級生も総合職が当たり前という雰囲気だったので、転勤や出張が多い仕事に就くことに対しても不安はありませんでした。

一昨年、大学のサークルの同級生と結婚しました。夫も在宅勤務が多く、今は二人とも家にいてモニターの取り合いをしています。休みの日はネットで動画を見たり、ゲームしたりして過ごしています。コロナ禍前は旅行したり、買い物したりすることが好きでした。

●ベトナムの文化も、日本の文化も

ベトナム語やベトナムの慣習、文化などは両親から教えてもらいました。ベトナム語は普通にしゃべれますが、読み書きとなると苦手意識があります。大学の長期休暇に祖父母を訪ねたりしました。実家ではベトナム料理が食卓に並ぶことが多かったのですが、私たち夫婦は日本の料理を食べています。ベトナム料理は手間がかかるので、実家に行った時、食べさせてもらっています。母は好奇心旺盛なタイプで日本の風習、たとえばお正月に鏡餅を飾ってみたりしています。来日直後は日本食が苦手だったそうですが、今では納豆もお寿司もなんでも食べられます。

日本で生まれ育ったので、ベトナム人の友だちは多くありません。大学時代同級生だったベトナムからの留学生（現在日本で就職）くらいでしょうか。彼女とは今も頻繁に連絡を取り合っています。

●女だから、外国人だから……と感じるギャップはあまりない

横浜市はすでに外国人が多く住んでいて、外国人に慣れていると思うので、改めてこういうことをやって欲しいという要望は今のところありません。逆に“〇〇コミュニティ”みたいに外国人どうしが固まってしまうと日本人が話しかけづらくなってしまいうんじゃないかと思います。ヘイトスピーチなどもあると聞きますが、正直ベトナムについて言及されることはないので、他人事という感じです。

両親からは「何かしたい」と言ってダメと言われたことはありませんでした。女性だからと抑えつけられるような経験をしたこともないですね。ただ帰宅が夜遅くなることについては良くないと言われることはありました。あとは大学浪人はやめたほうがいいとは言われました。「家事をこなさい」と言われたこともありません。“嫁役割”のようなものはベトナムにもあるので、日本人との結婚にギャップを感じることはあまりなかったように思います。国籍に関わらず、それぞれの家庭における習慣の違いというものはつきものですから。お中元やお歳暮を送る習慣がよくわからないということはありませんでしたけれど。夫の両親も学生時代から二人が付き合っているのを知っていたので、結婚に反対されることはなかったです。

職場では女性活躍が推進されていて、上司もとてもいい人で、男女のギャップなどを感じたことはほとんどありません。ただ、来客があった時、若手で女の子がお茶出しするという雰囲気はあります。自分については、ネガティブ思考もなく、両親の育て方や時代が女性を抑えつけることもないので満足しています。

第3章 当事者の語りから読み取る

本章では、インタビューで聞きとった語りの中で、彼女たちの困難とその困難の解決に向けて必要と思われることを次のテーマで分類し、テーマごとにその具体的な本人の語りを要約して挙げている。

1 当事者が語る困難

(1) 日本語の壁

10代になって日本に呼び寄せられた子どもにとって、日本語の習得が難しいことは最初の最も大きな壁である。

編入した学校では、授業がわからない苦痛とともに、日本語がうまく話せないことによる気後れや自信のなさ、孤独感を抱えている。来日前には快活だった自分が、自分らしさが出せない状況に陥る苦しさが語られている。

日本語の壁は、進学や就職にも不利に働き、進路を選択する可能性も限られていく。自らが親となり、母国語を使う環境で子育てに入ると、日本語の壁が子どもへと持ち越されていっている状況もみられる。

●思春期に呼び寄せられて

- ・当初は授業に参加しても何もわからないまま、それでも座っていなければならず、とても苦痛だった。国際教室で日本語を教えてもらうようになったが、ついていけない授業が多く、コミュニケーションが難しく、友だちはずっとできなかった。(10歳で来日)
- ・中学、高校とも部活や課外活動は一切やっていない。担任の先生から「まずは日本語習得が先」と言われたし、自分でも言葉が通じないのに楽しめるとは思わなかったから。
- ・来日前は学校で友だちも多かったが、日本ではまるでお人形さんのように、無言で反応のない子になってしまった。本来の自分自身ではないことが悲しく、悔しかった。もっと友だちとおしゃべりしたいが、聞くのに精一杯で、自分から話す余裕はない。耳が慣れてきても、自分から話しかけることがない、静かでおとなしいイメージを演じるしかなかった。(10歳で来日)
- ・母国では自分のことは自分でできる普通の中学生だったが、日本語がわからず、言葉を発することができなかった。数学の答えが分かって、数字の言い方がわからず、日本人らしい発音もできず笑われるという恐れもあって手があげられなかった。声をあげない＝意思がないように受け止められ、文化祭でも大道具係しかできず、しかも何をやってよいかを聞くこともできなかった。すると「なぜ何もしないの?」というクラスメイトたちの白い目を感じ、戸惑いながらも自分の気持ちを伝えられなかった。(14歳で来日)

●進路の選択などについて

- ・成績の問題があり、中学卒業後は定時制高校へ進んだ。高校になってやっと授業が理解できた感じがした（10歳で来日）。
- ・高校卒業後は母国の4年制大学に進学した。主な理由のひとつは高校の成績では自分が望む日本の大学の学部への進学が厳しかったから。（14歳で来日）
- ・皆に認めてもらうには日本語を話すしかないと思い、日本語の勉強を頑張った。日本語ができなければ将来がないと思っていた。日本語は毎日勉強していたが、高校では休み時間にも勉強して、高1で日本語能力試験N1に合格。内申点もどんどん上がり、成績も学年トップとなり自信が付き始めた。それでも日本人には絶対に追いつけない。できて当たり前でようやくスタート地点。日本語と中国語、すごくできなくても半分ずつなら合わせて100になるかなと思い、4年制大学の日本語教育専攻へ進学することにした。（10歳で来日）

●職業の選択について

- ・日本では大学で学んだ知識を生かした仕事を探したが、日本語が出来ないことがネックになり、就職先が決まらなかった。外国人が仕事をするには、日本語能力試験N2以上またはネイティブレベルの日本語が必要になることが多い。
- ・日本語の読み書きや漢字ができないと、外国人が日本で正社員やオフィスワークなど安定した仕事に就くことは難しい。母も含めて日本で長く働いているのに、安定した仕事に就けない人は多い。友人は、ひらがなが書けるか、漢字が分かるかと面接で尋ねられて傷つくと言う。意味は分かるので、そのうち書き方も覚えられるに。（夫のように中途半端な年齢で日本に来ると、日本語の勉強が追いつかず正社員になることは難しい。）
- ・外国人の親は日本語ができないと労力を使う仕事しかないし、賃金が低いから家にいたくてもたくさん働かなくてはならない、というつらさがある。

●子どもへの影響

- ・長男は3歳児健診の時、言葉が遅れているため自閉症ではないかと指摘を受けた。夫はあまり日本語が話せず、家では母国語で話す。子どもたちは母国語と日本語と英語で育っているため言葉が遅れてしまっているのではないかと考えているが、長男は現在、様子を見るため療育センターに通っている。
- ・（同居の）母が（私の）娘に母国語で話しかけるので、娘は日本語が不得手。外国つながりの子どもの居場所支援者に日本語と勉強をみてもらっている。

(2) 地域社会の壁

学校や職場、地域での差別や不本意な思い、経験が多く語られている。日本人の偏見や理解のなさに傷ついている。

「相談するという発想はない」「ひとりで頑張ってきたので人に甘えることは難しい」といった状況が多く語られた。

●学校で

- ・シャイな性格もあって日本語で話すことに苦手意識があり、中学、高校とずっと孤独だった。周囲とコミュニケーションが取れず、フラストレーションが溜まっていた。編入当初はクラスメイトも積極的に話しかけたり、世話を焼こうとしてくれたが、言葉が通じないことでそういう機会も減っていき、孤立していった。高校の時、同国人の友だちと母国語、英語で話していると、「なんで日本語が話せないのに日本にいるんだ」というようなことを言われたことがある。
- ・母国語で数を数えた友だちが、日本人の同級生の悪口を言っていると勘違いされ、呼び出されて暴力を受けた。本当にショックだった。「私がここにいることは誰からも歓迎されていない」「日本語が分からないのに日本人の場に入ってきてしまってごめんなさい」と思った。すべてに自信が持てなくなったのもこの頃。
- ・出産3か月後、中学に登校したら教室に入れてもらえず、体育祭や修学旅行にも行かせてもらえず、卒業アルバムにも写っていなかった。
- ・ハーフで目立つためか、中学では人の妬みを買うことがあった。メールのなりすましが流行り、私を装って他の子の悪口を言うメールが流れた。無実だったのに、担任の先生も信じてくれず、味方が一人もいない状況がつかなく、半年ほど学校に行けなくなってしまった。

●職場で

- ・バイト先の飲食店で私の名札を見て「日本人と替わって」と言われることがある。高校の時日本語が下手だから仕方ないかと思ったが、大学院の時、「私、中国人嫌い」と大声で言う客があり、店中がシーンとなった。日本語教育を専攻し、日本語が上手になればこんな経験はなくなると思っていたのに。そこでこれは自分が悪いからではないと気づいた。こういう人は国籍に関わらずいるのだ、もう自分にプレッシャーをかけるのは止めようと思った。
- ・一番イヤな思いをしたのは高校生でアルバイトをしていた時。日本語を話せないと「なぜここで働いているのか?」「日本人と話したい」と言われることがあり、ショックだった。しかし仕方がない、こういう人はいるものだ、気にしないようにしようと思い、この時の経験で、どうやって他の人とやっていくかを学ぶことができたと思う。
- ・英語講師は、イギリスやアメリカのネイティブ講師はアジア系や日本人バイリンガル講師よりも給料がよく、公平ではない。日本では保護者も、アメリカやイギリスの講師を選ぶ。高校時代も生徒は白人の先生に惹かれていた。これは自分では受け入れなければいけないことだと思っている。小さい教え子たちはそんなことは気にせず、楽しめれば良いという感じだが。

●地域で

- ・日本企業に長年勤めた父が正社員になれないのは差別ではないか。夫も工場のパート社員で非正規。外国人はいくら仕事ができても、見た目や名前で外国人と分かれば正社員にはなれないのだと思う。外国人の雇用が安定することを望む。
- ・(外国人の) 母の名前で家を借りようとする、かなりの確率で落とされてしまう。審査の段階で「外国人だからダメ」と言われたり、最初の段階でお断りされることも少なくない。これには強い違和感と怒りを感じる。
- ・(外国人の) 母が日本語がよく分からないことを知って、母に PTA の役員を押し付け、役員になったら日本語が下手だと笑う人がいた、と最近になって母から聞いた。日本語が話せないのだからママ友の輪に入ってくるなという雰囲気もあったという。裕福な地域柄でハーフというと白人系。アジア系の人には優しくない雰囲気がある。
- ・夫は医師が言っていることは分かるが、どうせ分からないだろうと細かく説明してもらえないので、私もついていく。

●人とのかわり

- ・大学4年になり、進路を考えた時、日本の会社に入って人と深くかわりながら仕事をするのは怖いと思った。人間関係の部分で本当にできるのかなど。SNS は母国のサイトを見ていた。日本の若者の興味やファッションの流行がわからず、そういった話ができないと関係づくりは難しいと思った。
- ・ひとりで頑張ってきたので、人に甘えることは難しい。日本に来てからずっと孤独を抱え、他人に悩みを相談することはなかった。
- ・悩みを相談できる人はいない。相談するという発想がない。自己完結型なので自分で考えて自分で決めるほう。子どもの時から母と教会に通い同国人コミュニティで親しくし、外国つながりの学生コミュニティでも活動していたが、学校も教会も進学や家の経済的なことなどを相談したり情報をもったりするところではない。
- ・相談できる相手はいない。家族のことを人に話したくないという思いが昔から強い。どうやって人に甘えたり、頼ったらいいのかわからずきた。ハーフにはそういう人、そして情緒不安定な人が多いと思う。でも、何も聞かずにおかずを差し入れてくれたり、そっと助けてくれる人、支えてくれる人がいてくれて、それはとてもありがたいことだと思っている。

(3) 情報の壁

日本の制度やシステムについて「外国人がもっている情報がとても少ない」ことが、進学や就業に不利になっている状況が語られている。今後の人生を切り拓こうとしても、「どこに相談したらいいかわからない」人もいる。

●情報の届かなさ

- ・母国では水泳の実技の授業がなかった。水着になるのが恥ずかしく、体育の授業を見学していたところ成績が1になり、高校受験にとても不利だと後で分かった。誰もそれについて教えてくれなかった。
- ・一般の入試を受けるために選んでいた学校は難しいので、外国人向け特別枠のある高校に変えようと先生から連絡があったが、それらの学校の違いが分からず、自分に合っているかどうかを考える余裕もなく、ただただ情報が不足していた。
- ・外国人はもっている情報がとても少なく、年金や育休ほか、いろいろな仕組みやシステムがあるのに知らされておらず、あることを知らない人が多い。保育園は仕事がないと入れないのに、どうやって仕事を見つけていいのかわからない。情報がないから友人の紹介でみつけることが多くなる。
- ・私の夫は日本語の問題があり高校は私立を勧められたが、聞かずに勉強を頑張り公立高校に進んだ。日本語ができない外国人の生徒が公立高校に進める制度や情報をもっとあるとよい。
- ・来日してから日が浅い人たちはいろいろな困りごとがあるが、支援の場所があることを多くの人は知らない。チラシを配布するなど、支援の情報などが必要な外国籍の人に広く行きわたるような工夫をぜひ行政にしていただけるとよい。

(4) 在留資格の壁

在留資格の不安定さは、来日した第一世代である親世代の苦勞のもと、第二世代の生活を不安定にさせている、家族滞在など就労時間に制約がある場合、生活の安定が得にくい。仕事を失えばビザも居場所も失う恐れがある。

在留資格の更新はさまざまな意味で負担が大きい。ビザの更新や変更に必要な情報は得にくく、何度も入管に書類を出し直すこともある。

●在留（定住）の不安定さ

- ・日本人なら仕事を辞めてニートになっても生きていくことができるが、私は仕事を失えばビザも居場所も失い、家族と離れ離れになってしまう可能性がある。いろいろな選択肢を持っておくべきだと思っている。
- ・母は 5 年ごとにビザを更新している。母は私が知る限りでも飲食関係や清掃の仕事などいろいろ。永住権を取るためにも一つの職場で 10 年ほど続けるほうが良いと考えて頑張っていたが、コロナ禍でシフトに入れなくなり、8 年働いた仕事を辞めざるを得なかった。結局、永住権も認められなかった。

●在留資格による就労の制限

- ・外国から呼び寄せた子どもたちは家族滞在ビザのため学生支援機構の奨学金を借りることができず、進学を諦めざるを得ない人も少なくない。就労も週 28 時間に限定され、アルバイトで学費を稼ごうにも足りず、親の仕事で大学の学費を捻出するのは困難。人生を変えるために頑張っても自分ですることは限られている。
- ・ビザの種類により就労時間に制限があり長時間働けないから困っているということをよく聞きく。永住権が無いと住宅ローンも通りにくい。大学に行きたくても経済的に行けない子どももいると聞きく。こういうところはもう少し何とかなるとよい。
- ・父は永住権を取得したが、母と妹たちは家族滞在で週に 28 時間しか働けない。

●在留資格（ビザ更新）手続きと入管の対応

- ・一番不便なのはビザ更新。就職する際、家族滞在から就労ビザに変更する手続きが大変だった。入国管理局のホームページで下調べをし、書類を揃えて行っても、追加資料を求められるなど 3 回直した。就職の内定証明書は形式を問わないとあったが、週 28 時間以上働くことを証明する必要があることを知らなかった。働く時間と日数を書く必要があるなら最初から伝えてほしかった。就職 1 年目は就職ビザが 1 年しか出ないことも。相談できる人や頼れる人がいないことが一番つらい。来年また更新手続きをする必要があり気が重い。
- ・夫は日本の永住権を持つ私の配偶者として毎年ビザの更新をしている。子ども 2 人はアメリカ国籍で、日本のビザを更新しなければならず手続きが大変。子どもが生まれると新生児を入管に連れて行かなければならなかった。
- ・ビザ更新の知らせは来ない。自分でいつも気をつけていなければならない。

(5) 娘である自分の進学と結婚

娘の進学を応援する親が多いが、将来の活躍に期待して娘の教育機会を確保しているケースから、日本の教育システムがわからないなど、本人が自ら頑張らなければならないケースまで、親の関わりには幅がある。

恋愛や結婚も、本人同士を尊重する親が多いが、恋愛よりお見合いという母や祖母の価値観との葛藤も語られている。一方で、中学生で未婚の母になっても相手や相手の親（いずれも日本人）の責任ある対応が得られなかった状況も語られている。

●進学について

- ・親からは「女の子だから〇〇しなさい」と言われたことはない。今は女性も働くところはたくさんあるから、やりたいこと、好きなことがあれば積極的にやったらいいと、地方から東京の大学へ行くときも応援してくれた。
- ・両親は、母国の子どもがあまりに勉強して子どもらしい生活を送れていないので、余裕を持たせるために私たちに日本で教育を受けさせることにした。母国の大学進学率は100%に近く、首都にある大学でないと就職が難しいと言われており、みんなすごく勉強する。
- ・進学や就職などの相談を親にしたことはない。いつも決まった後に報告してきた。親は日本の教育システムがわからないのと、心配をかけたくないという意識が強かったと思う。そのことをつらいとか、もっと甘えたかったと思ったことはない。
- ・母は日本語が話せても宿題や勉強をみることはできず、日本人の父も勉強を教えるタイプではなかった。

●結婚や妊娠について

- ・両親から「何かしたい」と言ってダメと言われたことはない。両親の育て方や時代が女性を押さえつけることもないので満足している。「嫁役割」のようなものは自国にもあり、日本人との結婚にギャップを感じることはあまりなかった。国に関わらず、各家庭における習慣の違いは付きものだから。夫の両親も学生時代から二人が付き合っているのを知っていたので、結婚を反対されることはなかった。
- ・祖母は経済的に豊かな男性と結婚しろと言う。母は結婚までいかない恋愛は時間の無駄で、恋愛するなら中国に帰すと言う。母や祖母は同国人との見合い話を持ってくるが、それらの人は自分のやりたいことを頑張っている私とは価値観が合うとは思えず、断ると「自分を見なさい。あなたはかわいいの？ 人を選べるの？」と傷つくことを言う。一緒に暮らしていると考え方の違いでぶつかるため離れようと、今は一人暮らしをしている。
- ・中2で妊娠。子どもの父親は日本人の高校生。彼はお腹を蹴って「墮ろせ」と言った。DVも受けた。両親に話すと母は怒り、父は「お前の人生だからお前が決めたらしい」と言ってくれた。双方の両親と話し合い、彼の両親に「生まれたら認知する」と言われたが不履行である。

(6) 親や家族とのかかわり

来日した第一世代である親が日本語を習得しておらず、第二世代の本人が通訳として頼られているケースは多い。そのため負担感も抱えながら妹や弟の世話役割も果たしている。

親世代に生活困難な状況がある中で、経済的に家族を支えたり、家計管理等の役割を負っている人も少なくない。子ども時代は多忙な親に十分面倒をみてもらえなかった、自らに子どもが生まれても子育てしながら三世代を支えなければならない、など重い負担がみられる。

特に、外国人の母親が日本人の父親との離婚や死別によりシングルマザーになった場合は負担が大きい。

●親の通訳をする役割

- ・(呼び寄せられて) 来日した時、両親から日本語の習得を期待されたことは、不公平だと感じていた。父は長年日本にいても日本語ができないが、私たちは若いからと来日して2~3年で流暢になると思っていた。どこかに行った時など、親が私たちに日本語で交渉するよう頼んできたが、あまり話せなかったのが辛かった。思春期ということもあり、親との関係はずっとギクシャクしていた。
- ・最近、親が年金の手続きに出かけたが、役所の窓口で英語が通じなかったため、授業中の妹を電話で呼び出して通訳してもらった。妹はかなり嫌だったと思う。病気になった時は、英語ができる医師がいる病院に通っている。最近父が胃腸系の疾患で別の病院に入院しましたが医師が英語を話せなかったため、妹が電話で通訳した。
- ・病院や役所で通訳をしなければならないのはとても大変。母の母語を私は忘れかけていて、通訳するにも分からない言葉がある。母が病院に行く時は、私が母の症状を紙に書いて母に渡す。役所から母の通訳として来るように言われることもある。遠方だったり、時間のない時もあり、とても不便。
- ・両親は永住権を持っているが、いずれも日本語が得意ではなく、漢字がわからない。妹や弟が小児科に行く時は、私がいつも一緒にいて通訳をさせられた。

●家族を支える役割

- ・賃貸住宅で夫と子ども、母ときょうだいの2世帯7人で暮らしている。妹、弟も働いており、それぞれ毎月5万円ずつ家に入れ、私がかつて管理している。母は工場で働いているが、病気があり無理できない。どうしてもやりくりできない月は夫の給与から多めに支出してもらっている。
- ・シングルマザーとして子どもと両親と4人で暮らしている。子どもが1~2歳の時からアルバイトを始めた。昨年、父が病気で倒れ、働けなくなった。今は私が家計を管理している。お金の使い方を考えたり、毎月の収支を合わせたり。母は日本語が得意でなく、父の入院手続きなどすべて私がやらなければならなかった。両親を支えていかなければ、それが負担になっていると精神科の先生からは言われている。
- ・母と二人暮らし。今でも進学はあきらめていないが、失業した母を支えるためにも週6日

働いている。

- ・母国の短大を卒業すると、母から「戻って手伝ってほしい」と連絡があり、日本に帰ることにした。母は2年前に父と離婚して、経済的にも精神的にも心細かったのかもしれない。妹と弟が反抗期で母の言うことは聞かないが、私の言うことは聞くという感じがあり。
- ・私には年の離れた妹と弟がいる。母は私以上に日本語が不得意なので、妹や弟のお迎えや連絡等は私がやるが多かった。

●親に面倒をみてもらえなかった子ども時代

- ・親が忙しすぎていつも家にいない、子どもの世話ができない家族も多い。家に帰っても誰もいないし、ご飯も用意してもらってなかった友だちがいる。
- ・両親は料理店を経営。昼夜を問わず働き、私はいつも店にいて近所のアイドルだったが、食事を作ってもらった記憶がない。
- ・受験の時、母は自国の正月のため、友人に娘の面倒をみるよう頼んで帰国してしまい、重要な決定を一人でしなければならず、大変な思いをした。

●ひとり親になった外国人母に育てられて

- ・母は私が小1の頃、日本人の父と離婚した。それからは母一人に育てられた。離婚した時、母はどのようにして母国に帰らなかったか聞いたことがある。そうしたら母は「フィリピンのほうが学費などは安く済むかもしれないけれど、勉強する環境は日本のほうが整っている。だから日本を選んだ。」と話してくれた。
- ・母には大学に行くように言われ、アルバイトもしたことがなかった。しかし、最終的に進学は断念し、進路未定で卒業となった。奨学金は、母が「あとで借金になるから借りないほうがいい」と言うのであきらめた。父にも遠慮して学費を頼むことはしなかった。母は大学に行っていていいと言ってくれたが、家計の事情を考えると行きたいとは言えなかった。
- ・両親の離婚後、「新しい家族がいてお父さんも大変」と、母は養育費を決めなかった。
- ・私に自信と誇りを与えてくれた父は、私が中学1年になる時、病気で亡くなった。父が亡くなった話はあまりしない。母子家庭になって「かわいそう」「大変だね」と言われるから。「お母さんを助けてあげて、支えてあげてね」とも言われる。母子家庭と言われ、両親が離婚した家庭とひとつでくくられるのもつらい。

(7) 日本人の視線とメンタルヘルスへの影響

日本人の歴史認識の薄さや無関心に直面して傷つくことが多い。それは個々に解決できる問題でもなく、同世代同士で話すのも申し訳ないような気がして黙ってしまう、と語られている。

●見えない圧

- ・国際的な環境で育ってきたので、日本はまだまだ島国だと感じることもある。私自身はいじめや差別を経験したことはないが、SNSでハーフや外国籍の子どもたちがいじめに遭っている事実を知り、大きなショックを受けた。外国つながりというと、〇〇パブを想起して馬鹿にされるので、ハーフということを隠す友人もいる。
- ・同年代と話していて日本語ができると「ハーフ？」と聞かれる。外国人だと伝えると「ずっといるのになぜ日本国籍にしないの？」と言われて閉口する。(自分の国は母国であると)日本人の前では言いにくい。自国人として誇りを持っていることなどはとても言いづらい。
- ・歴史の授業で、自分が知る歴史とは違うことを言われるのがつらい。自国では侵略者として扱われている歴史上の人物が日本では英雄。自分のアイデンティティは自国にあるといっても日本に悪感情があるわけではなく、どちらも理解できるが、どちらにも合わせるのには難しい。(中略)日本と母国の学生交流団体に入ったことがあるが、日本人の学生は、慰安婦のことなどはほとんど知らないのだからこちらが言及するのが申し訳ないように感じた。
- ・スポーツ観戦で「どっちを応援するの？」と友だちに聞かれて「私は自国を応援」と言うと「えー？」と反応される。私にとっては当たり前なのに、日本を応援することを強要されているように感じる。また「日本が勝って嬉しい」と言われても、私は自国が負けて悲しいので共感できない。それが言いにくく、共感を強制されているように感じる。その雰囲気からしてつらい。

●ハイトスピーチ

- ・駅前でハイトスピーチをする人たちと反対派がもめることがあるが、自分が議論の中心にいるようで怖い。外国人だと気づかれないようにその場を離れる。暮らしづらい、生きづらい。
- ・日章旗を掲げて大音量を出す街宣車は、日本人の友だちと歩いていても怖い。そう伝えたが「うるさいだけじゃない？」と言われ、言っても無駄だと余計傷ついた。このことは親と同国人の友人にしか話せない。言論の自由と言うけれど、傷つく人、怖い思いをする外国人のことも考えてほしい。
- ・ハイトスピーチに反対する人たちとも距離があると感じている。そういう運動に参加するには犠牲にするものが大きすぎると感じる。

(8) 家計の苦しさやコロナ禍の影響

進学や就職には、家庭の経済的な事情も大きくかかわっている。コロナ禍の経済悪化により仕事が減った、仕事に就けなかった状況もみられ、家計の苦しさは増している。特に外国人の母がひとり親となった家庭への影響は大きい。

●家計の苦しさの影響

- ・アメリカに留学して資格も取った。学費が尽きて1年で日本に戻り、就職活動をしようとしたが、日本では中退とみなされ高卒になると言われ、5か月間アルバイトし、その後日本の専門学校に行った。
- ・母には大学に行くように言われ、アルバイトもしたことがなかった。しかし、最終的に進学は断念し、進路未定で卒業となった。奨学金は、母が「あとで借金になるから借りないほうがいい」と言うのであきらめた。父にも遠慮して学費を頼むことはしなかった。母は大学に行っていていいと言ってくれたが、家計の事情を考えると行きたいとは言えなかった。
- ・外国人の親は日本語ができないと労力を使う仕事しかないし、賃金が低いから家にいたくてもたくさん働かなくてはならないというつらさがある。

●コロナ禍による就職への影響

- ・大学で医療系を学んだ。卒業がコロナのまん延時期と重なってしまった。持病があり、主治医からワクチン接種の回避を勧められたため、病院への就職はあきらめた。病院に就職する同級生が多かったが、私は整体院で働くことになった。
- ・留学して得た専門を活かして就活したが、コロナ禍で内定取り消しになった。もう1つの会社も取り消しになった。大きなショックで体調が悪くなり病院に行ったところ、精神科の受診を勧められ、受診を続けている。現在は就職先を探しながら、小売店でアルバイトをしている。
- ・コンビニで働いている。時給は1100円。週6日、14時半から23時半ごろまで働いている。次の仕事を探すためのつなぎと考えていたが、コロナ禍で希望する接客業の求人はほとんどない。もっと賃金のいい仕事をしたいと思いながら、見つけれない。
- ・母はコロナ禍でシフトに入れなくなり、半年ほどで仕事を辞めざるを得なくなった。その後食品工場の派遣の仕事をしたが、契約が満了すると次の更新は受けられず、1年ほど失業している。

2 解決に向けて必要なこと

(1) 日本語学習や進学へのサポート

学校の国際教室、各区国際交流ラウンジ、地域の日本語教室があり、教師や学習支援ボランティアの指導は、進路選択の可能性を広げる大きな役割を担っている。が、情報面、精神面でのサポートは不足している。

外国人の増加に伴い日本語学習のニーズも増加しているが、一方で学習支援ボランティアの減少がみられるなど、きめ細かなサポートが難しくなっており、支援体制の拡充が求められている。社会人になっても、更にオンライン学習など働きながら学べる環境を求める声もあった。

●教師や日本語学習支援者が支え

- ・編入した市立中学は外国につながる生徒が多く、わからないことがあれば同国人の級友に尋ねたり、通訳してもらって助かった。国際教室で日本語を習った。学校から親へのプリントは、国際教室の先生が中国語に訳してくれた。外国人が多い分、色々な配慮があったと思う。国際交流ラウンジにも週1日通った。残念だったのは、日本人のクラスメイトと話したり、友だちになったりする機会が少なかったこと。
- ・自分らしさを取り戻すため別の中学に行きたいと相談したところ、先生から教師に中高一貫校を勧められた。小論文を居残りで教えていただいた。
- ・高校では外国人のための日本語の特別授業があり、担当の先生が「外国人だからできるのはここまで」とは言わずに「頑張ったらこういう道もある」と道を提示してくださり、希望を与えられた。
- ・日本語学習支援のボランティア教師の誘いでクラスを手伝いながら日本語指導を受けた。その甲斐あり公立の短大に進学できた。短大時代も日本語指導を受けた。シングルマザー世帯の授業料免除制度もボランティア教師が調べてくれた。

●ニーズに合わせた支援体制の強化が必要

- ・地域の日本語教室に通ったが、参加者が多く会話の機会は少なかった。
- ・20歳で2年制の専門学校に入学したが、勉強についていくことは大変で、地域日本語教室のボランティアの先生にたくさん手伝ってもらった。この方は中学の国際教室の先生でもあった。日本語を教えてくれる人を探して役所の教育委員会で尋ねたら、この団体を紹介してくださった。
- ・大学卒業後日本に帰って来た時、漢字をほとんど忘れていたことに気づき、勉強をし直した。今は日本語能力試験N3受験のために勉強している。もっと日本語を勉強しようと思うが、仕事をしているのであまり時間がない。日本語のオンラインレッスンを役所などが提供してくれればと思う。

●生活が安定する仕事に就けるように

- ・家計の事情で進学を断念したが、あきらめていない。これからでも大学、短大、専門学校に行きたい。
- ・(留学してビジネススクールで学んだが、日本語能力がネックとなり就職が決まらず) ハローワークのビジネス日本語クラスや、ボランティアのビジネス日本語クラスに通い、履歴書の書き方などを覚え、英語学校に就職した。将来は大学で英語を教えたい。大学院で学位を取る必要を感じている。そのため貯金と日本語学習が必要と思っている。
- ・以前から医療や介護の仕事に興味があったが、自分には無理だとあきらめていた。でも介護の仕事を始めた友人から、介護ならば資格がなくても始められると聞き、介護施設での仕事を始めた。収入は夜の仕事の5分の1に減ったが未練はなく、お年寄りの話を聞くことが大好きだったので、仕事は充実していてとても楽しかった。天職と思った。身体を壊して退職し、今は飲食店で働いているが、心身の状態を安定させ、いずれは介護職に戻りたい。
- ・コロナ禍で内定取消となり体調不良。小売店でアルバイトをしているが、早く母を楽にさせてあげたい。就職に備えてTOEICの勉強中。母国と日本の懸け橋になるような仕事がしたい。

(2) 多言語での通訳・翻訳が必要

生活に必要な情報の多言語化や通訳、翻訳は、日本語が不十分な家族の通訳としての役割を負う子どもたちを、負担から解放することにもなる。特に、役所や病院で安定的に通訳、翻訳が得られる環境が望まれている。

●役所や病院には通訳を置いてほしい

- ・役所では通訳のボランティアを頼むことができるが、いつも頼めるわけではない。
- ・役所に英語に通じる職員が少ないことで苦勞することが多い。公的な翻訳ボランティアを利用することもできるが、個人情報観点から重要書類の翻訳は頼めない。母の友人は雇用契約書や婚姻届なども断られた。私的な文書も翻訳してもらえない。役所から母の通訳として来るように言われることもあるが、私にも都合があるし、とても不便。役所では外国人の人も増えているので、役所や病院で簡単でも通訳ができる人が増えてほしい。
- ・母は教育委員会で働いている先生に大変お世話になっている。英語もスペイン語も話せる人なので、母は何かあるとその先生にお願いしている。この人が退職してしまったらどうなるのかと心配する。役所や病院の窓口に、いろいろな言語が話せる人をおいてほしい。
- ・健康保険などの基本的なサービスについての説明の翻訳もほしい。

(3) 通訳や日本語学習のサービスは「仕事」に

通訳ボランティアでは、外国人女性も活躍し、利用者の「生活と精神の安定に貢献」しているが、収入が不安定な中で交通費程度の報酬は厳しく、仕事として携われるようになることが望まれている。また、日本語を教える日本人についても、ボランティアだけに頼ることには限界がある、という指摘もみられる。

●通訳・翻訳は安定したサービスとして共有されるべき

- ・母は国際交流ラウンジなどで通訳ボランティアを務めてきたが報酬は交通費程度。外国人親子の生活と精神の安定に貢献している。仕事であるとよい。
- ・どこの学校の生徒も学びに来られたが、今は人数の関係で限られた学校から、その中でも選ばれた子どもたちしか来られないと聞く。理由は外国人が増えて学びたい生徒が以前より多いのとは逆に、日本語ボランティアが減っており、手が足りないから。これでは以前のようなきめ細かい支援は受けられないだろうと思う。ボランティアだけに頼ることには限界がある。
- ・私が子どもの頃は外国人が少なく、今より手厚いサポートが得られた。国際交流ラウンジはどこの学校の生徒も学びに来られたが、今は人数の関係で限られた学校から、その中でも選ばれた子どもたちしか来られないと聞く。理由は外国人が増えて学びたい生徒が以前より多いのとは逆に、日本語ボランティアが減っており、手が足りないから。これでは以前のようなきめ細かい支援は受けられないだろうと思う。

(4) 相談の場

思春期で来日した子どもたちの学習以外の不安や悩み、社会人になってからの就学や就職の希望など、外国につながる子どもや若者には、どこに相談したらいいかわからない状況がみられる。話を聞いてもらったり、相談できる場所があるとよいとの希望が語られている。

目的に応じた相談窓口とともに、地域に「居場所」をつくることで困りごとを聞けるような環境づくりの必要性、さらに第二世代の自分も学習支援ボランティア等に助けられたので、今度は自分が支援する側になりたい、という意向が語られている。

●相談の場が確保される必要がある

- ・日本語の先生やボランティアの方々は、学習支援には熱心だったが、話題は勉強のことで生活や友人関係などについては尋ねられたことがないし、話せる雰囲気もなかった。
- ・一度は諦めた大学進学だが、いつか必ず進学したいという思いはもっているが、どこに相談していいのかわからない。
- ・高校時代の同国人の友だちはフリーターが多く、代り映えのない毎日で、人生を変えたいけれどもどうしていいかわからない、どこに相談してよいか情報もないと言う。
- ・彼女が中学生で妊娠していた頃、本人から話しかけられたが、話を聞き出す機会を逸した

まま会えなくなって悔やまれた。外国つながりの子どもたちの居場所づくりをしているのは、この経験から。今は彼女の子どもが居場所に通っている。

- ・子どものことは療育センターのソーシャルワーカーに相談する。知り合いに子どもの心配があれば療育センターを紹介するなど手伝いたい。自分も支援者に助けられたので。

(5) 若者・当事者主体の場づくり

自らの経験を活かして、外国につながる子どもたちを支援したい、居場所をつくりたいという積極的な意向がみられる。支援の場が、自らの居場所でもあり、成長の機会になっているとの実感もみられる。この意向を力としていくための場づくりが望まれる。

●後輩たちに自らの経験を伝え、支えたい

- ・学生ボランティアをしていた時期に、生徒たちに「先輩、どうやって高校に入ったんですか?」「どうやってそこまで日本語が話せるようになったんですか?」と言われ、すごく頑張ってきたんだと自分で初めて思うことができ、かつ人の役にも立てるようになって、頑張ってきてよかったと思った。
- ・自分だけで頑張ってきたが、誰かいたらもっとたくさんの情報が得られる。「なんでもいいから話を聞くよ」「どんなことでも話してね」と言ってくれるだけで心の支えになる。日本語学習支援では、後輩の子どもたちに、友人関係や困ったことがないか、勉強以外の話を聞くようにしている。ビザ申請の苦労なども伝えたい。相談できる相手になりたい。子どもたちに会いに行くことで、自分の息抜きの場にもなっている。
- ・大学で日本語教育を専攻し、実際に日本語を教える経験を積むため、中学生の時に放課後に通っていた国際交流ラウンジの学習支援教室でボランティアのサポーターとして中学生に日本語や教科を教えた。それがきっかけで、日本語教育といっても自分と関わりのある後輩や子どもたちのためにできることをしたい、それは自分にしかできないことだという思いができた。
- ・差別的な発言をされることもあるが、それは国籍の問題ではなくその人自身の問題。多様なバックグラウンドを持つ人がいるということを知ってもらうことが大切だと感じ、国際交流ラウンジで学習支援を受けた卒業生同士で居場所をつくり、後輩たちに何ができるかを模索している。外国人としてではなく、一人の人間としてやりたいことを見つけて自分が納得できる人生を皆にも過ごしてほしいと思う。
- ・私がした苦労を後輩にさせたくない。日本語学習支援ではビザ更新手続きに関して後輩たちに情報共有するようにしている。何か月も前から準備するんだよ、など。

(6) 学校や地域社会による包摂

学校や、地域社会が外国につながる人をもっと包摂することが求められている。国の歴史観の違いを乗り越え、個や友人として気持ちを聞いてもらったり、分かち合える関係や場が求められる。

●学校による包摂

- ・母国語を誤解された生徒たちが日本人生徒にいじめられ、日本語がわからないことに自信が持てなかった頃、担任の先生がみんなの前で「この子たちは自分がいたいからここにいるわけではなく、親の都合でいるんだ」と話してくれて救われた。
- ・日本と母国との関係、日本と母国での歴史観の違い、外国人の感情を日本の若者は知らない。「昔は仕方なかった」と片付ける日本人が多い。小学校で国際理解教育が進むとよい。

●地域による包摂

- ・地域のイベントでお年寄りに「ジュースが余ったから持っていきな」などと言われると、日本人というより地域のおじいちゃん、同じ人間だと思えるようになった。
- ・店の客から「娘が成人しても若いから第2の人生を歩める」と言われ、同世代と比べて焦らなくてもいいと思えるようになった。
- ・隣人から「ごめんね」と言われたことがある。慰安婦問題のこと。政治問題と言うより個人レベルでこんな話を普通にできたらよい。
- ・子どもの入学に必要なものなど、母は地区センターやボランティアの人などに聞いた。周りの人に助けられて子育てした。
- ・小中学生のうちには学校を通じて地域の人と知り合う機会があるが、就職するとまったくない。そういう場所があるとよいと思う。外国人支援も、学校につながっている間はいいけれど、そこから出ると難しくなる。日本人と外国人が交流する場がもっとあるとよい。文化や食生活に慣れるのも時間がかかる。地域の特産物や歴史などを知らないのも、そういうものを紹介してくれて地域の方と触れ合える機会があったらいいなと感じている。

第4章 見えてきた課題と今後に向けて

1 インタビューを終えて

(1) 全体を通しての所感

11人のそれぞれの語りから私たち聞き手が感じたことは果てしなく、山のようにあった。

インタビュアーを務めた飯島裕子さんは次のように所感を述べている。

「いろいろな方がいらっしや、まとめるのには困難も感じます。特に困りごとについては個別性があり、共通ではないものが多くあるという印象を受けました。たとえば、教育ローンで学生支援機構の奨学金は親に永住権があるなど、安定したステータスの場合は借りられますが、そうでない場合は対象にすらなりません。私が最も印象深かったのは、在留資格の不安定さでした。人権を無視したような入管の対応や、ビザ取得の基準（種類や年限など）について合理的な説明ができないような線引などをインタビューからあらためて感じ、疑問を感じました。十数年日本に住み、育ったのに、（1年更新のビザしか取得できず、）来年この国にいられるかどうかわからないような状況には憤りを覚えます。

インタビュー全体を振り返ると、多くの方がとても明るくしっかり自分を持っている、魅力的な方たちだったと感じています。こちらのほうが勇気づけられ、エネルギーをもらえたような気がします。もちろん大変なこともいろいろあると思いますけれど、支援が必要な人という枠にくくるのではなく、ポジティブなエネルギーから学ぶところがたくさんあるし、日本の若い女性たちと一緒に何かやっていたら、お互いに相乗効果が生まれるのではないかとも思いました。」

「支援が必要な人という枠にくくるのではなく、ポジティブなエネルギーから学べる」という見方には私たちも大いに共感する。そこで、ポジティブなエネルギーが感じられた点を「ストレングス(強み)」として、いっぽうで大変なことを「困りごと・壁」として以下に列挙する。

【彼女たちのストレングス(強み)】

- ・人並み以上にがんばってきたタフさ
- ・もともとの能力、体力、精神力、持久力
- ・国境を越えて広い目で世界を見ており、グローバルな視野で日本社会をも対象化していること

- ・ 学習支援団体等からサポートを受ける受援力
- ・ 「次は自分もサポートする側になりたい」という心意気と行動力
- ・ 家族思いのマインド
- ・ 人を魅きつける力とホスピタリティ
- ・ 親の離婚・再婚等をのりこえていくレジリエンス
- ・ 日本社会に期待を感じられなくとも、自力で道を切り開いていく自立心
- ・ 同じ当事者のなかまでグループを立ち上げ、後輩を助ける場を作っていること

【彼女たちの困りごと・壁】

- ・ (中途来日の場合)日本語がわからず、ここに存在すること自体への不安
- ・ 入国管理局でのビザ(更新)をめぐる不便と煩雑さ
- ・ 不安定な在留資格とそれによる労働時間等の制限、低賃金
- ・ 安定した仕事に就けないこと
- ・ 親の生計が不安定、長時間労働で自宅に不在がちであること
- ・ 進学しづらさ、教育ローンの負債
- ・ 役所や病院で(親が)日本語でやり取りできず、サポート役にならざるをえないこと
- ・ 生活のサポート情報が届かないこと
- ・ 家が借りにくいこと
- ・ 「外国人はきらい」と言われること
- ・ 困りごとを相談できない・しないこと
- ・ 中学生で出産後、復学時に教室に入れてもらえなかったこと
- ・ 祖母・母から見合結婚プレッシャーを受けること

(2) レポートからこぼれ落ちたこと

各人のレポートには盛り込めなかったが、こんなことも語られていた。

「友だちにもこのインタビューを受けたいよとすすめたけれど、断られた」。

今回語ってくれた女性は特別に恵まれた人たちだったのだろうか。必ずしもそうではなくて、紹介者である日本人支援者・団体との関係のなかで、これまで話を聴いてくれるという安心な場や経験を持っていたからではないだろうか。そのような経験もなく、安心できる聴き手がいなければ自己を開示することはまずないであろう。初対面の私たちに対して本当によく語ってくださったし、一部分ではあるかもしれないが、彼女たちの貴重なライフヒストリーを今回ここに収載させていただいた。

2 本調査で見えてきたこと

(1) 私たちが新たに認識したこと

今回、外国につながる第二世代の女性たちから生の語りを聞くことで、改めて認識したことは以下の3点である。

1点目は、横浜にすでに10万人の外国人が身近に住んでおり、「多文化共生」という言葉が使われるようになって久しいものの、あまり当事者と出会うことも関わることもなく、私たちは仕事や生活をしてきたということである。それによって、無意識に差別しているかもしれない、第二世代の若年女性の存在に気付いたとしても、関わる機会をつくれなかったことが女性の生きづらさや、相談しづらさにつながっていたのかもしれない。そういった意味では、日本に移住し、生活をしている女性たち自身やルーツである国の歴史を知り、関わる土台を築くことが私たちの側にまず必要であると感じた。

その土台ができて初めて彼女たちに、こんなふうに暮らしたい、生きていきたいと話してもらうことができるだろう。そういった意味では、いまようやくスタートラインに立ったばかりである。

2点目は、第二世代ともなれば、外国籍ではなく日本国籍を持っている人が約半数に上っていた事実への認識である。このことは、横浜に移住後の時間の推移を示している。彼女らは国籍上外国人ではないため、より生きづらさは見えにくい。一方でグローバルな視点を持ち合わせている人もおり、その強味も知ることができた。

3点目は、今回次ページの検討委員の意見にもあるように、第二世代の若い女性を対象としたことで、マイノリティである彼女たちのこれまでの生活経験に焦点をあて、当事者が言語化してくれたことで、彼女たちの視座に立って、私たちが課題をとらえなおすという作業を行えたことである。この報告書をまとめる作業を通じて、11人の女性たちのこれまでの生活の軌跡を互いに知ること、自身を俯瞰し、他者とつながるきっかけができるかもしれない。

インタビューアの飯島裕子氏の力を借りながら、女性たちが当事者の声を聴き、それを伝えていくことに男女共同参画センターが深く関わることは、あらためて意味があるのではないかと考えた。

(2) 調査結果についての検討委員意見

2021年12月、インタビューレポートをもとに開催した検討会では、調査結果について検討委員から次のような意見が寄せられた。

・ジェンダー視点をもってインタビューが行われたと思うが、結果はそれ以前の見えない水面下に存在することごとをすくい取ったというところではないか。

・日本語の壁を抱える親や本人には通訳や翻訳、学習等の支援が必要で、それらが女性を主とするボランティアで賄われていることはたいへん不十分である。通訳や翻訳、学習支援等の仕事はボランティアではなく有償の仕事とすべきこと。そのための予算を付けること。これは外国人受け入れをさらに進めるにあたって、早急に必要なことだろう。

・(外国につながる人々の支援や調査研究にかかわる身としては)このインタビューで語られていることごとはこれまでも再三聞かれたことであり、特段驚くようなことではなかった。しかし、第二世代の若い女性にフォーカスしたという点ではこのような調査は初めてであり、意義のあるものとする。

・今後、母と娘という二世帯にわたる時間軸を立てた調査もできるといい。90年代に来日した母の世代はどうだったのか、娘はどうなっているのか、など。この調査に続く横浜市の調査や取組に期待している。

・(日頃外国につながる若者たちと付き合う立場からは)たいへんな強さがあるという話だが、“強いと言われたくない”という当事者もいる。自立心の裏に孤独がある。そのことを理解してほしい。解決のためにも、本人たちが元気になれる「居場所」が大切。

・日本で生まれ育った人と、思春期に途中で呼び寄せられた人とはまた事情がちがう。とくに後者では、10代の子どもの場合は通常は学校や家庭で守られているだろうことが守られていない生活状況に置かれている。その状況に手がさしのべられてほしい。

・把握された課題は大きく、多方面にわたり、重い。必要なことの全部を男女共同参画センターでできるわけでもない。しかし、地域社会における課題をわかりやすく発信し、ジェンダーの問題にも留意しながら課題の共有を進めていくことはできるのではないか。それが次のアクションにつながるのではないか。

(3) 日本社会に求められていること

これまで述べてきたところから、私たちがいま日本社会に求められていると考えたことを以下の図のように整理した。

▶ヘイトスピーチに代表される差別的な排外主義、偏見、歴史への無知の払しょく

▶在留資格取得や手続きの負担軽減及び人権視点に立った入国管理局の対応

▶行政の手続きや生活サポート情報を確実に、わかりやすく届けること

▶就学や就業の機会を拡大すること

▶医療通訳や行政通訳・翻訳を多言語で必要な際に必ず提供すること

▶通訳・翻訳者等の支援に関わる仕事は、経験の豊かな当事者(登用)を含め、有償の仕事とすること

▶身近で相談できる人や場所、居場所が当事者の望む方向でつくられること

▶中途来日の児童・生徒への日本語・学習・メンタル・生活を支える学校のしくみづくり

3 今後に向けて～私たちにできること

前ページ 1-(3)で整理したようなことを進めていくために、社会的な環境整備、公共の場の提供、活動支援、発信等を当事者の望む形で、ともに行うのが、私たち公共施設の役割ではないだろうか。それは前項 1-(2)で検討委員が述べている「地域社会における課題をわかりやすく発信し、課題の共有を進めていくこと。それが次のアクションにつながるのではないか。」という意見とも符合する。

インタビューの中で「闘いの場」から「生活の場」へ(変わってきた)」とAさんが語っている。生活の中で地域の人々とともに過ごす場、ただそこに居ていい場があることは望ましいことだ。支援者と呼ばれる人に支援を任せるのではなく、地域で日常生活を共にする私たちにも、個人としてもっとできることがあるかもしれない。そのような一歩踏み込んだかわりが求められている。

たとえば、現在、公益財団法人横浜市国際交流協会が運営する「なか国際交流ラウンジ」にて、当事者による活動（レインボースペース）が行われており、このような活動と連携していくこともできるだろう。

ただ、そのようなかわりは、当事者が安心できる居場所(自助活動と発信を同時に行えるような場)が保証されて初めて、次の段階として地域の人々との交流が可能になるのではないだろうか。その意味で、当事者の場づくりと発信を支える環境整備はどちらも必要不可欠なことである。

前述したとおり、私たちの取組はまだスタートラインに立ったばかりである。これまでこの分野を切り拓いてこられた活動団体に敬意を表し、さらに学んでいきたい。また、さまざまな関係機関と連携していきたい。

当センターの具体的な取組としては、これから 2022 年度に本調査のインタビュー当事者、支援団体に調査結果を報告する報告会を開催する。これをきっかけとして、外国につながる二世世代の若年女性らの生活課題や要望を、支援団体や当事者と協働で発信するような場をつくることを考えている。ひきつづき、本調査を通じて考えた取組を今後一つひとつ着実に進めていきたい。

資料

参考文献

① 自治体による調査報告書

- ・横浜市市民局女性計画推進室(1997)『横浜市外国人女性の生活実態調査 報告書』
- ・横浜市国際局 (2020)『令和元年度 横浜市外国人意識調査 調査結果報告書』
- ・川崎市市民文化局市民生活部多文化共生推進課 (2016)
『川崎市外国人市民意識実態調査 (インタビュー調査) 報告書』

② 企業・民間団体（公益財団法人等を含む）によるレポート等

- ・公益財団法人横浜市国際交流協会 (YOKE) (2018)
『南区・外国人インタビュー調査結果報告書』
- ・海老原周子 (2021)『外国ルーツの若者と歩いた 10 年』公益財団法人東京都歴史文化財団
アーツカウンシル東京
- ・高谷幸 (2020. 10)「共感と想像力のあわいで」『We learn』pp. 3 公益財団法人日本女性学
習財団

③ 研究者による論文等

- ・長谷部美佳 (2011)「地域社会と外国人住民の“つながり方”～ジェンダーに注目して～」
『シリーズ多言語・多文化協働実践研究』No. 12 pp. 50-59 東京外国語大学多言語・多文
化教育研究センター
- ・稲原美苗 (2020)「なぜ今、フェミニスト現象学なのか？展開と挑戦」『フェミニスト現象
学入門—経験から「普通」を問い直す』pp. 90-100 ナカニシヤ出版

- 大事にしていること
- 日本や、自分の生まれた国を好きか？

3 現在の健康状態

- 現在の体調(眠れているか)
- 医療機関等の利用状況・健康診断の受診状況
- 具合が悪いとき、どうしているか？
病院に通う場合は、どんな病院に通っているか？
- 具合が悪いが病院に行かないよう言われた、または行けなかったことはあるか？どんな理由で行けなかったか？

4 現在の仕事について

- 仕事の有無(あり・なし)
- 【仕事をしていない場合】
- 現在の状況及び これまでの仕事について
- 【仕事をしている場合】
- どんな仕事をしているか？ してきたか？
- 就業形態(契約社員、派遣社員、パート・アルバイト、その他)
- 1日の労働時間、1週間(あるいは月)の勤務日数
- (差し支えなければ)収入(税込の月収・年収)
- 現在のしごとについて、総合的な満足度、思うこと
- 今やっている仕事のやり方をどう思うか？
- 自分の意見を提案できる環境か？
- どうしたら仕事で自分のルーツを活かせると思うか？
- 職場の人とのやりとりで困ったことはどんなことか？
- 新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、仕事に変化があったか？

5 これまでのライフヒストリーについて

- 支援機関(具体的な名前)とつながったきっかけ
- 支援機関(具体的な名前)には、いつ頃どのくらい通っていたか？
- 支援機関(具体的な名前)では、どんな支援をしてもらったか？(日本語、勉強、その他)
- 親(特に外国人の親、母親)についてどう感じ、どう見てきたか？関係はどうだったか？
- 娘だからと、とくに求められた(期待された)ことはあるか？
- 家事(負担)はどうだったか？
- 家で使う言語は？
- 親に勉強や進学についてどのように言われたか？

- アルバイトはしていたか？
- 地域のイベントなどに参加したことがあるか？
- 近くに家以外の安心できる場所があったか？
- 外国にルーツのある仲間とのつながりがあったか？
- 進学、就職、結婚といったライフイベント時に、支えとなったもの、人は？
- 将来をどんな風に考えていたか？
- 差別を感じたことはあるか？(いつ、どのような)
- 好きなこと、取り組んでいること
- どんな時に幸せを感じるか？

6 将来の希望

- 将来、どんな夢や希望があるか？ 将来どんな風になっていたいかな？
- どのようなサポートがあるとうれしいか。
たとえば、男女共同参画センターでやっていたらいいなと思うこと…
- 日本人にもっとこうして欲しい、地域社会がもっとこうだったらいいなと思うことはあるか？

横浜市外国人女性 生活状況インタビュー調査にあたって

調査団体：公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会

調査時期：2021年6月～11月

調査場所：横浜市男女共同参画センターほか

目的： 横浜市で外国籍市民が10万人をこえて増えつつける中、横浜市男女共同参画センターでは外国につながる女性が住みやすい地域社会をつくるため、インタビューを行います。今回、横浜市に10年以上住み、両親あるいはどちらかの親が外国人である(第2世代の)20代30代女性にお願いしています。暮らしの状況やご希望、必要な情報やサポートがとどいているか等をお聞きし、今後の役立つサポートやプログラムづくりに生かしていきます。つきましては、次の条件でインタビューをお受けいただきたくお願いします。

調査結果：お聞きした内容については個人が特定できないように記録し、原稿を1度確認いただいた後、報告書に掲載いたします。印刷した報告書は支援者等ご希望の方のみに配布し、当協会ホームページでは、短くまとめた概要版のみ公開いたします。

同意書

(調査内容とあなたの権利について)

- 1 この調査では、あなたがこれまでに経験されたこと、これから希望することなどをお聞きします。
- 2 答えたくない質問には答えなくてかまいません。
- 3 話された内容は個人が特定されない形にまとめ、報告書に掲載します。話された内容については守秘を守り、調査目的以外に使われることはありません。
- 4 原稿作成のときの確認のために、いったん録音しますが、報告書作成後は必ず消去・廃棄します。

●調査協力者(インタビューを受ける人)

私は1～4までを調査員から確かに伝えられ、同意しました。

年 月 日

署名

○調査員

私(調査員)は1～4までを調査協力者に確かに伝えました。

年 月 日

署名

外国につながる第二世代の横浜市若年女性 インタビュー調査報告書

年月： 2022年3月

発行： 公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会
男女共同参画センター横浜南
〒232-0006 横浜市南区南太田 1-7-20

Tel： 045-714-5911

E-mail：mkoho@women.city.yokohama.jp

※一人ずつのインタビューレポート(第2章3)を掲載した本報告書は、
支援団体・関係者にのみ限定的に配布。
当協会のウェブサイト上では、これを除いた部分を公開しています。